

NO KE  
野 芥 遺 跡 5

—野芥遺跡群第12次調査報告—

2008

福岡市教育委員会

NO KE  
野 芥 遺 跡 5

福岡市埋蔵文化財調査報告書第987集



調査番号 0360  
調査略号 NKE-12

2008

福岡市教育委員会

## 序

現在、九州の中枢都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は、増加の一途をたどっています。

そして、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、本市早良区野芥1丁目において発掘調査を実施した野芥遺跡群第12次調査の記録を収録したものであります。

調査の結果、弥生時代と古墳時代の集落、古代の官衙的な大型建物・中世の集落が確認され、長きにわたって本地域が発展し続けた事を示す良好な資料を得ることができました。

調査に際しご協力をいただいた関係者各位、また地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝する次第です。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会  
教育長 山田 裕嗣

## 例　　言

1. 本書は井上嘉造氏が実施した早良野芥1丁目853-1, 3・854-8, 13・854-9の一部において民間開発にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成15年度に実施した野芥遺跡第12次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は磁北で、真北はこれに 6° 21' 東偏する。
3. 調査区は予定建物を基軸として任意の 3 m 方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は北交点とした。
4. 遺構の呼称は略号化し、住居→SC・井戸→SE・土廣→SK・溝→SD・柱穴→SPとした。
5. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦・山田ヤス子による。
6. 本書に使用した遺物実測図は加藤・平川敬治・井上加代子・米倉法子による。
7. 製図は井上加代子による。
8. 本書に用いた写真は加藤による。
9. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
10. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

# 本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II.	調査区の立地と環境	2
III.	調査の記録	7
1.	調査の概要	7
2.	弥生時代の調査	9
3.	古墳時代の調査	24
4.	古代の調査	33
5.	中世の調査	39
IV.	小結	47

# 挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig. 2	調査区位置図 (1/4,000)	4
Fig. 3	調査区周辺測量図 (1/500)	5
Fig. 4	造構全体図・土層断面図 (1/200・1/50)	6
Fig. 5	SC04・03・02・06実測図 (1/60)	10
Fig. 6	SC04出土遺物実測図 (1/3)	11
Fig. 7	SC03出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig. 8	SC02出土遺物実測図. 1 (1/3)	14
Fig. 9	SC02出土遺物実測図. 2 (1/3)	15
Fig.10	SC02出土遺物実測図. 3 (1/3)	16
Fig.11	SK09・13・SD01実測図 (1/40・1/60)	18
Fig.12	SK09・13・SD01出土遺物実測図 (1/3・64-1/2)	19
Fig.13	SP出土遺物実測図 (1/3)	20
Fig.14	下面包含層3・4層遺物分布図 (1/200)	21
Fig.15	包含層3・4層出土遺物実測図. 1 (1/3・76-1/2)	22
Fig.16	包含層3層出土遺物実測図. 2 (1/3)	23
Fig.17	その他の弥生時代土器実測図 (1/3)	25
Fig.18	その他の弥生時代石器実測図 (2/3・109・113~115-1/2)	26
Fig.19	SC01実測図 (1/60)	28

Fig.20	SC01出土遺物実測図. 1 (1/3) .....	30
Fig.21	SC01出土遺物実測図. 2 (1/3) .....	31
Fig.22	SC01出土遺物実測図. 3 (1/3) .....	32
Fig.23	SC01出土遺物実測図. 4 (1/3・148-1/2) .....	33
Fig.24	SK10・11・12実測図 (1/40) .....	36
Fig.25	SK10・11・12出土遺物実測図 (1/3) .....	37
Fig.26	SPその他の出土遺物実測図 (1/3) .....	38
Fig.27	SB01実測図 (1/100・1/40) .....	40
Fig.28	SB02実測図 (1/100) .....	41
Fig.29	SK02・04・07実測図 (1/40・1/60) .....	42
Fig.30	古代の出土遺物実測図 (1/3) .....	43
Fig.31	SE01実測図 (1/60) .....	45
Fig.32	SE01出土遺物実測図 (1/3・210・211-1/2) .....	46

## 写 真 目 次

Ph. 1	調査区東壁土層断面 (西から) .....	7
Ph. 2	上面遺構全景 (北から) .....	9
Ph. 3	下面遺構全景 (北から) .....	9
Ph. 4	SC04土器出土状況 (東から) .....	12
Ph. 5	SC02・03・04 (奥より・北から) .....	12
Ph. 6	SC03横断土層 (西から) .....	13
Ph. 7	SC03土器出土状況 (東から) .....	13
Ph. 8	SC02東部土器出土状況 (北から) .....	17
Ph. 9	SC02西部土器出土状況 (北から) .....	18
Ph.10	SC02出土遺物 .....	18
Ph.11	SK09 (西から) .....	9
Ph.12	SK13 (東から) .....	21
Ph.13	SK09・SD01出土遺物 .....	21
Ph.14	南西部包含層4層掘削状況 (北から) .....	24
Ph.15	包含層3層土器79出土状況 (南から) .....	27
Ph.16	包含層3・4層出土遺物 .....	27
Ph.17	その他の弥生土器 .....	28
Ph.18	その他の弥生時代石器 .....	28
Ph.19	SC01土層断面 (北東から) .....	29
Ph.20	SC01 (東から) .....	28
Ph.21	SC01土器出土状況 (南から) .....	29
Ph.22	南西部土器出土状況 (南西から) .....	29
Ph.23	北東部土器出土状況 (西から) .....	29
Ph.24	陶質土器146出土状況 (西から) .....	29
Ph.25	SC01完掘状況 (北から) .....	29
Ph.26	SC01出土遺物. 1 .....	34
Ph.27	SC01出土遺物. 2 .....	35
Ph.28	SK11 (東から) .....	35
Ph.29	SK11土器出土状況 (南から) .....	35
Ph.30	SK10 (東から) .....	36
Ph.31	SK12 (東から) .....	38
Ph.32	SK12土器出土状況 (南から) .....	38
Ph.33	SK11出土土器 .....	39
Ph.34	SPその他の出土遺物 .....	39
Ph.35	大型建物SB01 (北から) .....	41
Ph.36	C-3・SP13遺物出土状況 (北から) .....	41
Ph.37	D-2・SP16遺物出土状況 (北から) .....	41
Ph.38	SK02 (南から) .....	42
Ph.39	SK04 (北から) .....	42
Ph.40	古代の出土遺物 .....	44
Ph.41	SK07 (南東から) .....	44
Ph.42	SK07土器出土状況 (南西から) .....	44
Ph.43	SE01土層断面 (北から) .....	45
Ph.44	SE01 (北から) .....	45
Ph.45	SE01出土遺物 .....	46

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市早良区野芥1丁目853-1, 3・854-8, 13・854-9の一部において、井上嘉造氏より自宅兼用共同住宅建設設計画の策定に当たって埋蔵文化財の有無の照会のため、平成15年7月25日に事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された事により始まる。申請面積は827.59m<sup>2</sup>、受付番号は15-2-387である。

埋蔵文化財課で確認した所、申請地が野芥遺跡群の範囲内であり、内容など状況を把握するため同年8月19日確認調査を実施し、その結果弥生時代の遺物包含層と土坑・柱穴多数を検出した。

同課では設計変更等での現況での保存が可能か申請者と協議を重ねたが、結果として保存は困難と判断した。そのため遺跡の破壊を伴う建物部分に限定して事前の発掘調査を実施する事となり、調査に関して同氏と教育委員会との間で委託契約が締結された。

発掘調査は平成16年1月5日に着手、同年2月18日に全ての行程を終了した。

調査番号	0360	遺跡略号	NKE-12
調査地地籍	早良区野芥1丁目853-1, 3外	分布地図番号	83(野芥) 0319
開発面積	827.59m <sup>2</sup>	調査実施面積	291m <sup>2</sup>
調査期間	040105～040218	事前審査番号	15-2-387

## 2. 調査の組織

【調査委託】井上嘉造

【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 生田征生（当時）

【調査総括】文化財部長 境徹（当時） 埋蔵文化財課長 山崎純男（当時）

調査第1係長 力武卓治（当時）

【調査庶務】文化財整備課 後藤泰子（当時）

【発掘調査】加藤良彦

【発掘作業】菊地栄子 山田ヤス子 脇山千代美 岩見美津代 阿比留忠義 菅野武 尾崎泰正

有江笑子 安河内史郎 下司昭枝 井上八郎 海津宏子 吉川春美 貴田潔

永島重俊

【整理作業】木村厚子 国武真理子 南里三佳 竹田幸子 平川泰世

## II. 調査区の立地と環境

本調査区（1）は福岡市の都心部より西へ4.9km、旧海岸線より南へ5.1kmの地点の、室見川が貫流する早良平野の南東部、油山山塊から北に樹枝状に派生する低位段丘の砂礫台地群の、南北約1600m・東西約300mの南北に長く延びる丘陵中央の稜線部に立地する。標高は約18.5mである。（Fig.1）。

室見川右岸の周辺の歴史環境を概観してみると、中位段丘や中位段丘下位面残丘の台地・独立丘上に旧石器・縄文早期の遺跡が点在しており、有田遺跡群（2）・飯倉F遺跡（3）・本遺跡第7次調査・重留村下遺跡・東入部遺跡群でナイフ型石器・細石器が、縄文時代早期はクエゾノ遺跡・前期は沖積地の微高地上まで進出し、四箇遺跡群（4）・田村遺跡（5）で轟B式土器・曾畠式土器・堅穴・ドングリビット等が検出されている。中・後期では有田遺跡で貯蔵穴様ビット60数基・四箇遺跡群で埋甕・堅穴・堅穴住居・特殊泥炭層（堅果類果皮の多量堆積—ヒヨウタン・リヨクトウ出土）が出土。晚期では前半に重留遺跡で堅穴住居が検出され、突帯文の時期に増大し有田七田前・拾六町ツイジ・四箇・四箇東（6）・田村・重留（31）遺跡などで大陸系磨製石器・木製農耕具未製品・矢板列・埋甕・堅穴住居・溝等が検出されている。

弥生時代前期前半は前代と重なって海岸部の中・低位段丘上に多く、有田遺跡には300×200mの大規模な環濠が出現し、藤崎遺跡では土壌墓群が見られる。また、内陸部の東入部遺跡・本調査でも幾の破片が出土している。前期後半からは有田遺跡群や田村遺跡群、内陸平野部にも飯倉遺跡群（3・7~12）・東入部遺跡群など集落・甕棺墓が展開し、中期にはさらに面的な広がりを見せ内陸奥部にまで及ぶ。岩本遺跡では水田が検出された。海岸部の西新町遺跡では無文系土器・板状鉄斧と含鉄鉄滓・ガラス容器・ガラス玉等海洋拠点的な様相を示し、原遺跡（13）では半島系瓦質土器を、東入部遺跡群で甕棺130基中より細形銅劍1・銅劍10・素環頭刀子1・鉄矛1・鉄刀1・鉄劍1・鈴1を、飯倉C遺跡（9）では甕棺から細形銅劍・素環頭太刀が出土、有田遺跡群では甕棺から細形銅戈・前漢鏡などが出土している。免遺跡群（14）では大規模な井堰が検出されている。後期では飯倉D遺跡（10）で後期後半の集落から小型仿製鏡の鋳型・鉄器鍛冶関連遺物が出土しており、先進地域の様相は変わらない。

弥生終末から古墳時代前期にかけては海岸部に西新町・藤崎で竈を持つ住居・方形周溝墓等が検出され、三角縁鏡などが出土。多くの漁具と引き続き瓦質・陶質土器等半島系土器を目立つて出土する。平野部では重留・有田遺跡で集落が検出され、中期ではクエゾノ古墳群（15）で前方後円形の1号墳が検出され、重留で70m級の前方後円墳（坪塚一重留1号墳）・方墳（重留2号墳）があり、飯倉H遺跡（16）では27mの小型の前方後円墳を検出している。重留では須恵器窯が、梅林遺跡（30）では大壁建物・オンドル住居が、クエゾノ古墳群では多量の鉄滓と鍛冶道具が出土する。6世紀前半～中頃にかけ山麓部の重留・三郎丸古墳群で古墳群の造営が始まり6世紀の後半以降から荒平にかけにわたり増大する。集落は有田遺跡群・原遺跡群・田村遺跡群・飯倉遺跡群・重留・東入部遺跡群等に展開する。

古代では有田遺跡群で7～8世紀の早良郡衙と考えられる建物群が検出。本遺跡は早良郡七郷の「能解」郷にあたり、周辺には条里地割りにちなむ地名が残り、圃場・区画整理が進むまでは条理遺制が良好に残っていた地域である。第4次調査では大型建物群と円面硯・刻字土器等が出土し、官衙と思われる。重留遺跡でも円面硯・東入部遺跡では大型建物群と唐三彩・石帶等同様に官衙と思われる。

中世には野芥荘にあたり、田村遺跡群・次郎丸遺跡群・清末遺跡等で集落が調査され、清末遺跡では方形に区画された居館が検出されている。



Fig.1 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

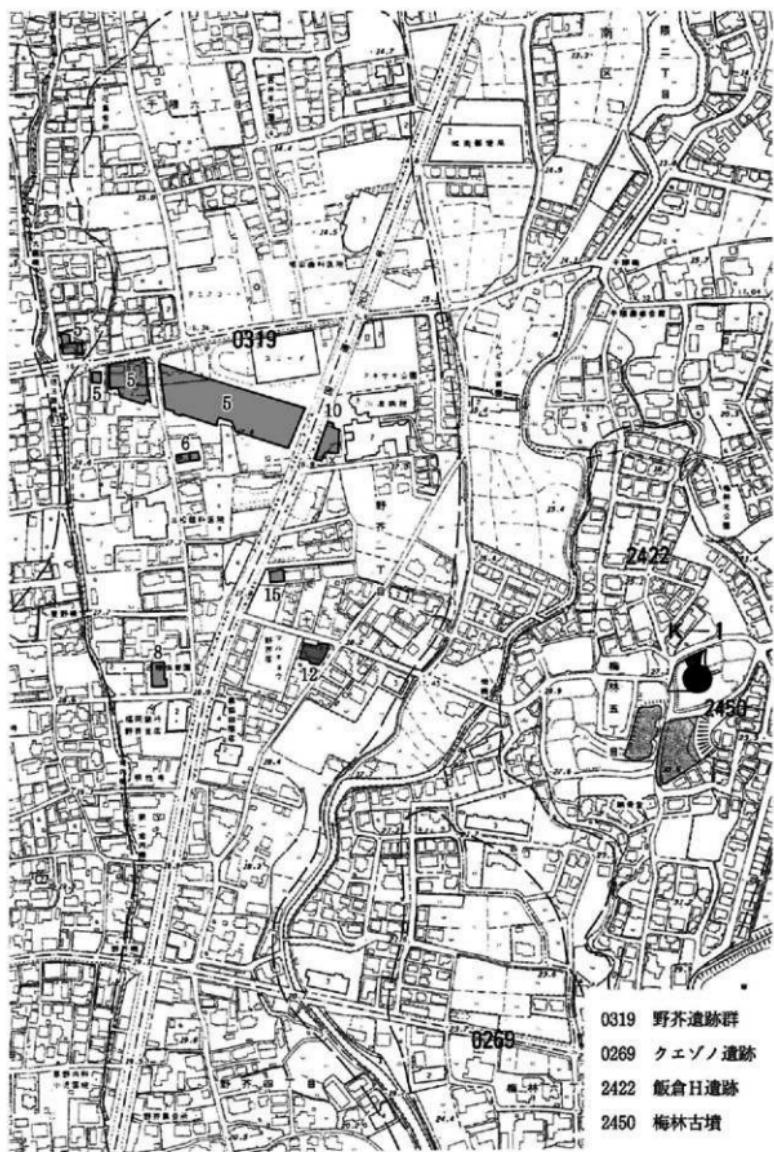


Fig.2 調査区位置図 (S=1/4,000)

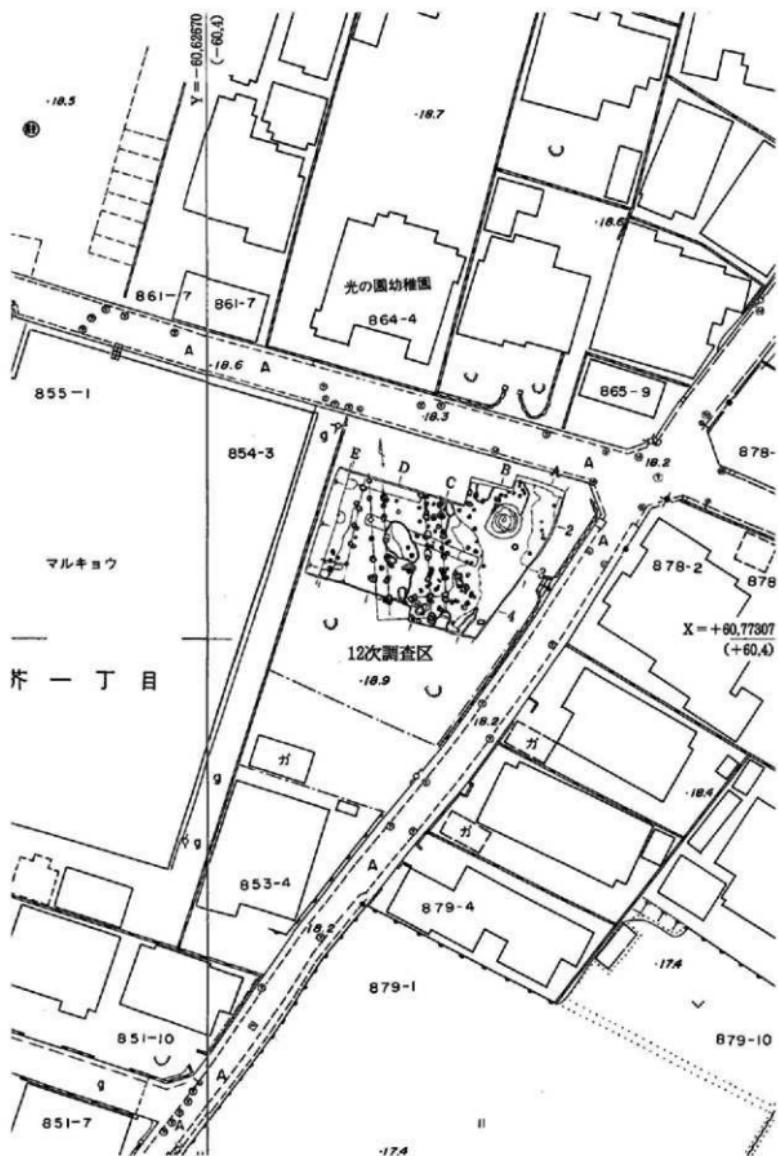


Fig.3 調査区周辺測量図 (S=1/500)

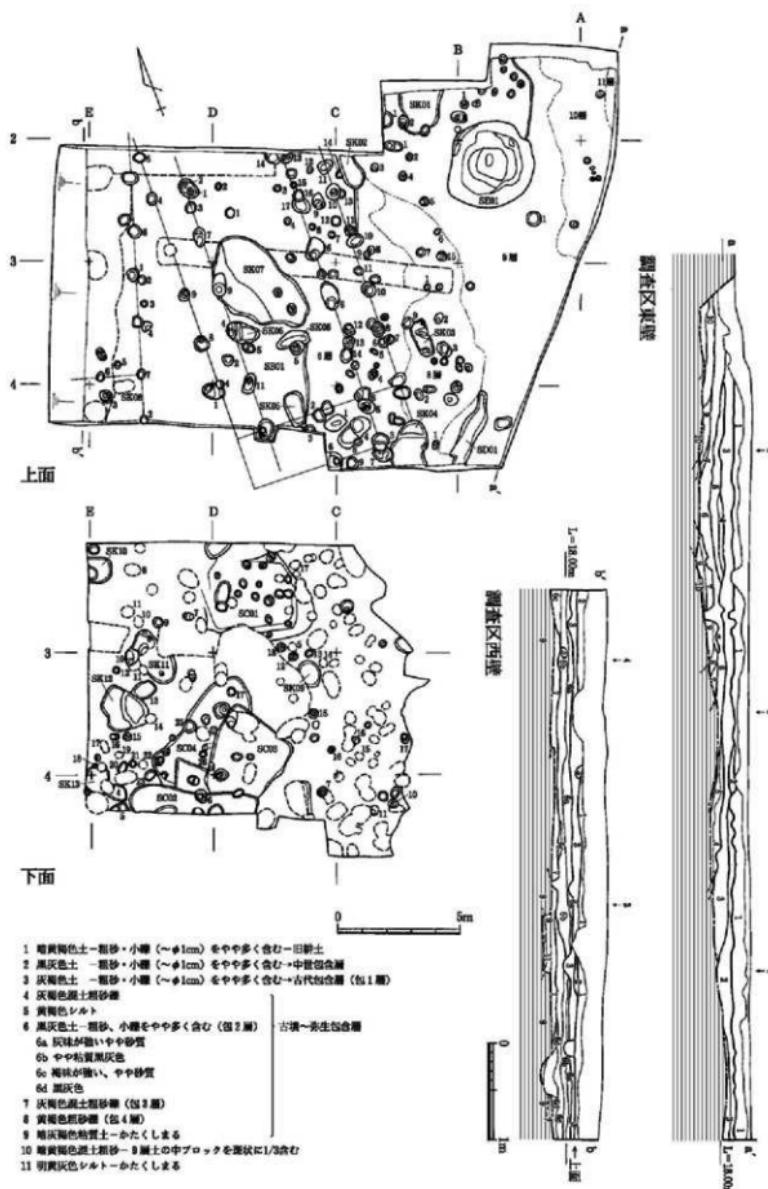


Fig.4 造構全体図・土層断面図 (S=1/200・1/50)

# III. 調査区の記録

## 1. 調査の概要

遺跡群は、東側を油山川に、西側を金屑川の支流に開析された南北約1600m・東西約300mの南北に長く伸びる低位段丘の砂礫台地に立地し周辺には同様に南北に枝状に広がる丘陵上に、次郎丸古石遺跡(17)・免遺跡(14)・野芥大藪遺跡(18)が西に、クエゾノ遺跡(14)・飯倉遺跡群(3・7~12)が東に、山崎古墳群(19~21)・西油山古墳群(22~29)が南に連なる。本調査区は遺跡群の中央部に位置し、現地標高は18.5mである(Fig.1~3)。

層序は(Fig.4) 20~30cmの表土・客土・耕作土(1層)下に10cm程の黒灰色土の中世包含層(2層)・10~15cm程の灰褐色土の古代包含層(3層-包含層1層)が堆積し、遺構検出は西半部では3層を除去した段階で実施した。以下の堆積は東から西に緩く傾斜しており、古代に整地が成された可能性がある。古代以前の土層の傾斜から、丘陵の稜線は本調査区東の南北道路部分で有り、東に偏った地形が復元される。現況でも南から本調査区の道路部分までが最高部となっている。試掘調査の状況では3層下の黒灰色土古墳・弥生包含層(6層-包含層2層)下面で弥生時代遺構検出となっていたため、調査区東から表土剥ぎを実施した段階では、6層まで除去したが、途中から3層下面に遺構面が残存する事が判明したため、西部では6層下面を調査下面として2面の調査を実施した。また、西部では6層下に灰褐色混土粗砂砾弥生・古墳包含層(7層-包含層3層)・流路の可能性がある黄褐色粗砂砾弥生包含層(8層-包含層4層)が確認されたため、部分的に調査を実施している。

上面でのおもな遺構は弥生中期後半の溝1条、10世紀の大型建物1棟・掘立柱建物1棟・土壙3基、12世紀後半の井戸1基・土壙1基である。

下面では弥生中期後半の堅穴住居2軒・後期前半の堅穴住居1軒・土壙3基、古墳時代前期堅穴住居1軒・土壙5基を検出した。

遺物としては弥生時代板付1式~終末期土器・瓦質土器片・石器・鋳造鉄斧片・古墳時代前期の陶質土器と多くの外来系を含む土師器、古代・中世の土師器・綠釉陶器・貿易陶磁器などコンテナ16箱分出土している。

下面調査では遺跡群内では珍しく弥生後期前半と古墳前期の集落が検出され、それぞれから1片ずつの半島瓦質・陶質土器片と畿内系を初めとする多くの外来系土器が出土した。西新町遺跡など海岸



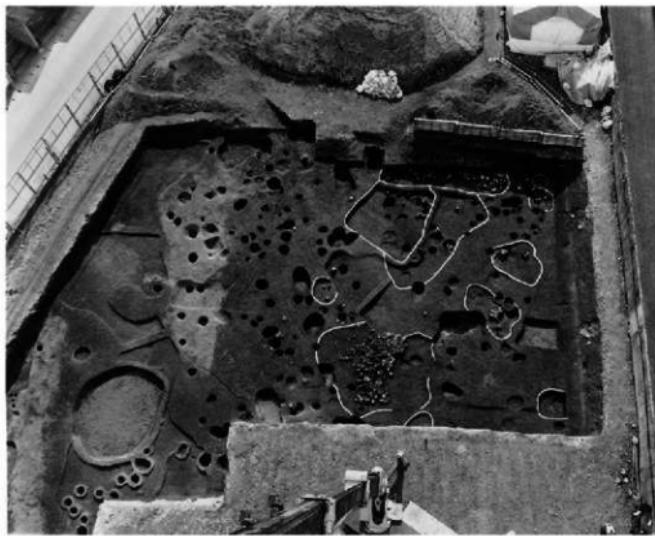
部の遺跡に劣らない、広域にわたる交流の実態を示している。

上面調査ではほぼ南北に沿う、10世紀代の四面庇を持つ4間×7間以上の大型建物1棟を検出した。当該地は『和名抄』に記載される早良七郷の「能解郷」にあたり、後に「野介荘」が置かれた地域である。南1km程の第4次調査区では古代の官衙的な大型建物群が検出されており、これとの関連が示唆される。関連資料としては綠釉陶器が2点出土している。

Ph.1 調査区東壁土層断面(西から)



Ph.2 上面遺構全景（北から）



Ph.3 下面遺構全景（北から）

## 2. 弥生時代の調査

弥生時代の資料は6層黒灰色土から8層黄褐色粗砂礫の包含層2～3層中で多く検出され、6層下面を中心に造構が検出される。造構は調査区南半部に集中し、中期後半～後期前半の竪穴住居が3軒切り合いで、その周囲に土墳2基・溝1条・柱穴が分布する。

### 1). 竪穴住居

今回の調査では下面南部で、中期後半～後期前半の竪穴住居が3軒切り合って検出され、平面形は何れも方形を呈する。6層下位から弥生中期包含層の8層に掘り込まれている。

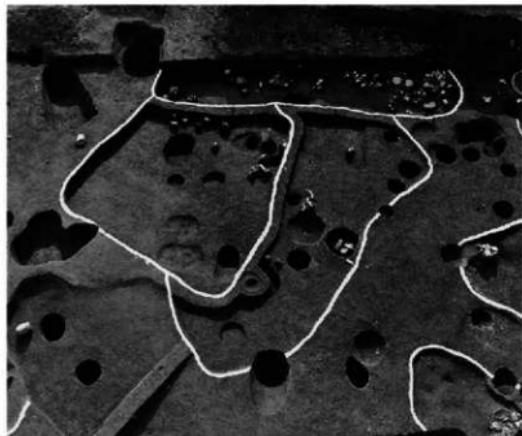
① SC04 (Fig.5 Ph.4・5) SC04はE3グリッドに位置し、3軒切り合いのなかでSC02・03に切られて検出された。平面プランは方形で長軸方向はN-61°-Eにとる。規模は4.67m×3.0m+αで、深さは14cm程を測る。覆土は黒灰色土・灰褐色砂質土で、遺物は床面より遊離する。造構の大半を切られるため、主柱穴は不明瞭で、炉の有無は明確でない。

出土遺物 (Fig.6) 1～5は壺で、1は広口口縁で口径26.4cm、外面に丹塗研磨を施す。胎土は



Ph.4 SC04土器出土状況（東から）

橙色。2は鋤先口縁で口唇に刷毛目工具で刻目を、外外面にヨコナデと細いケンマを施す。口径16.4cmで橙～黄橙色を呈す。3・4・5は底部で、3・4は外底がやや上部で外外面にタテナデ様の粗いケンマを、5は平底でタテハケを施す。底径はそれぞれ7.0・7.0・8.5cmを測る。6は鋤先口縁の高環で外外面に丹塗研磨を施す。口径24.6cm。7は大形筒形容器台の脚部で外外面にタテ丹塗研磨を施す。径21cm。8～12は甕で、8・9は「逆L字」口縁で、8は口径22.4cmで外外面に細かなタテハケを施し、9は口径29cmで外外面にやや粗いタテハケを施す。10・11は「T字」口縁で、10は口径33cmで外外面にヨコナデを施す。橙～黄橙色を呈す。11は口径34.7cmで口縁下に三角突帯を1条施し外外面にヨコナデを施す。橙色を呈す。12は底部で、外底接合部が窪み底面は薄い。外面に粗いタテハケを施す。径は8.5cmを測り、純い橙～黄橙色を呈す。13は大形甕の口縁小片で「逆L字」口縁の端部を打ち欠いている。口縁下には四角突帯を施す。外外面にヨコナデを施し、純い黄橙色を呈す。14は円柱状の支脚で指頭圧痕後ナデを施す。純い黄橙色を呈す。15は口径9.2cm



Ph.5 SC02・03・04（奥より・北から）

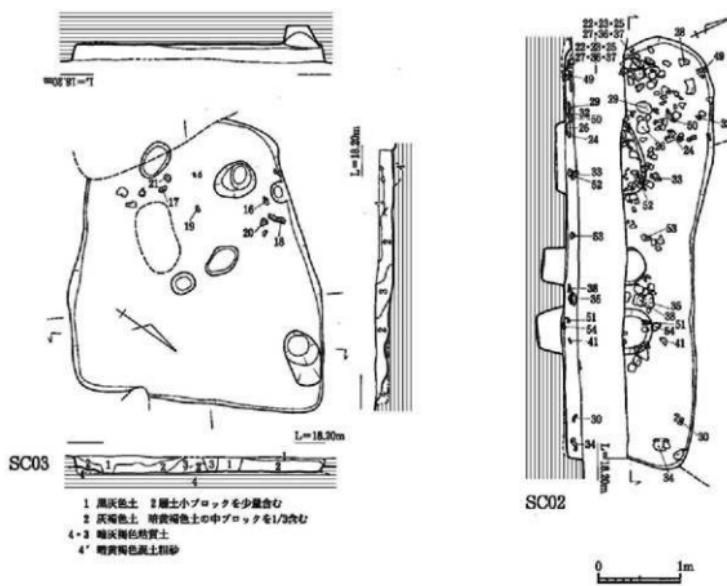
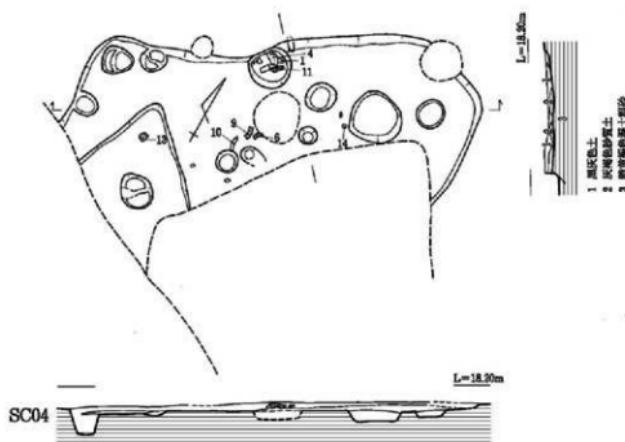


Fig.5 SC04・03・02実測図 (S=1/60)

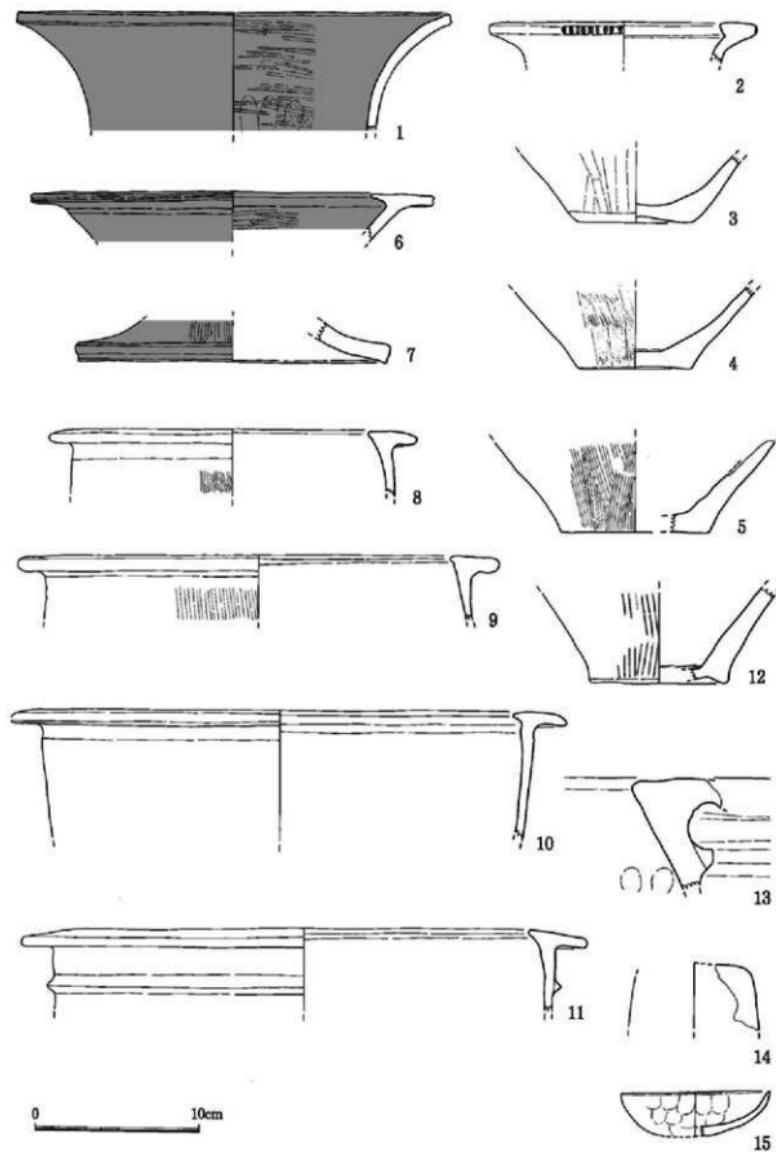


Fig.6 SC04出土遺物実測図 (S=1/3)

高2.8cmを測る坏で、内外面に多く指頭圧痕を残し粗くナデる。胎土は精良で橙色を呈す。14とともに後期の混入の可能性がある。以上、時期は中期後半である。

② SC03 (Fig.5 Ph.5~7) SC03はSC04の東に位置し、これを切って南側の一部をSC02に切られる。平面プランは3.15×3.08mの小型の方形で、長軸方向はN-50°-Eにとる。深さ24cmを測る。覆土は黒灰色土・灰褐色砂質土で、一部暗黄褐色混土砂の間層が入る。遺物は少量が南側で床面より離れて出土する。柱穴は5つ程検出されるが不規則な配置である。炉は検出されない。

出土遺物 (Fig.7) 16・17は壺底部で、16は外底がやや上げ底で外面に粗いタテハケを施し、17は外底際が若干くびれ細かなタテハケを施す。底径はそれぞれ10.8・9.4cmを測る。橙色を呈す。18~21は壺で、18は「T字」口縁で、外面に粗いタテハケを施す。口径は33cmを測り、浅黄橙色を呈す。19は「く字」口縁で、内面はヨコ・ナナメハケ後ヨコナデ。鈍い黄橙色を呈す。終末期の混入。20・21は底部で、20は外底の端部全周を焼成後打ち欠く。底面はやや上げ底で外面に細かなタテハケを施す。径は6.2cmを測り、鈍い橙色を呈す。21は平底で外面に細かなタテハケを施す。径は11cmを測り、外面は暗赤橙色を呈し、強い火熱を受けている。以上、時期は中期後半である。



Ph.6 SC03横断土層（西から）



Ph.7 SC03土器出土状況（東から）

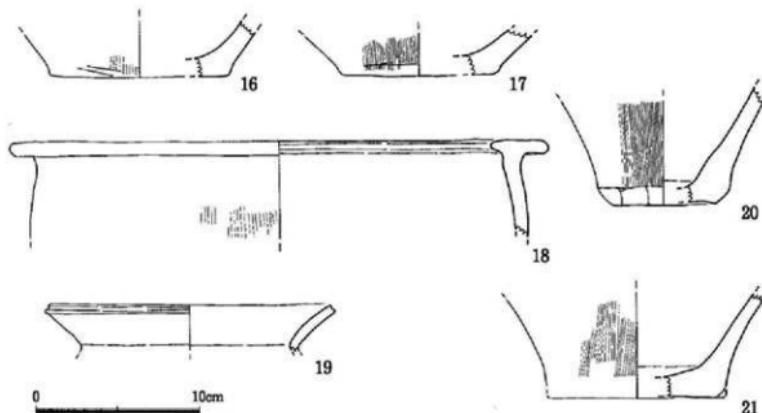


Fig.7 SC03出土遺物実測図 (S=1/3)

③ SC02 (Fig.5 Ph.8~9) SC02はSC03・04の南に位置し、これらを切って造構の大半が南の調査区外に広がる。平面プランは $5.3 \times 1.07\text{m} + \alpha$ の方形で、長軸方向はN-60°-Eにとる。深さ25cmを測る。覆土は黒灰色土・灰褐色砂質土で、遺物は多くの中期後半～後期前半・終末～古墳初頭の土器片が東西2箇所に混在して床面より若干浮いて出土する。柱穴は3つ検出されるがどれが主柱穴であるか不明である。

出土遺物 (Fig.8~10 Ph.10) 22~30は壺で、22~24は袋状口縁を呈す。22は口径13cm。外面は2種のタテハケ、頸部の三角突帯には凹点を1点施す。胎土にカクセン石を含み橙色を呈す。23は同型で口径13.7cm。外面は2種のタテハケ、胎土にカクセン石は含まず橙色を呈す。25の口縁の可能性がある。24は口径12.4cm。調整は粗く内外に指頭圧痕が残る。純い橙色を呈す。25は胴部で、平底から球形の胴部が連なり最大部に三角突帯を施し、頸部の三角突帯を介して口縁部が垂直に延びる。最大径で31cm。外面は2種のタテハケ、胎土にカクセン石は含まず橙色を呈す。胴上半に焼成後の径7mm程の穿孔が4箇所成される。26は胴部下半で胴最大部に「M」字突帯を施し、丹塗りは下半までヨコイタナデを、以下に粗いタテハケを施す。最大径で32.6cm。純い黄橙色を呈す。27~29は底部で、27は外底際がくびれ細かなタテハケを施す。28は外底際が若干くびれ外面にタテイタナデ。径8.8cm。29は外底がやや上げ底で外面に粗いタテハケ、底径は10cm。純い黄橙色を呈す。30は直口する短頸壺で口径10cm。胴上半にナナメハケ下半にケズリ後粗いケンマ。胴内面はヨコナデ。31~37は壺で、31~34は「く字」口縁を呈す。31は口径28.8cm。胴外面に粗いタテ内面にヨコハケを施し緩くナデる。口縁外面に煤が残る。橙色を呈す。32は胴外面に細かなタテハケ、以外はヨコナデ。口縁内面にヨコハケが残る。橙色を呈す。33は口径24.2cm。内面はナナメイタナデ後ヨコナデ。胴外面に細かなタテハケ、口縁部はヨコナデ。口縁内面にヨコハケが、外面に煤が残る。純い橙色を呈す。34は口径16cm。胴内面は2種のタテハケ胴上位は細かなヨコ、下位はナナメハケ、口縁部はヨコナデ、内面にヨコハケを残す。胴下半は強い火熱を受け剥離が著しく煤が付着する。純い黄橙色を呈す。35は丸底如意形口縁で口径14器高18.5cm。胴外面は粗いタテハケ、内面下半はタテケズリ上位はヨコナデ。胴外面中位に4cm程の帶状に煤が付着する。下位は火熱で赤変。純い黄橙色を呈す。36・37は平底底部で、36は径10cmで外面に粗いタテハケを施し、橙色を呈す。37は外面に細かなタテハケ。径8.4cm。内面は全面黒色外面は純い黄橙色を呈す。34・35と38以降は混入品と判断したもので、38は丸底広口の直口口縁壺で口径21器高14.5cm。外面上位は横位のタタキ後ナナメハケ下位はイタナデ。内面は2種のナナメハケ。39~41は鉢で、39は口径19.4cm、外面は横位のタタキ後上位はナナメハケ下位はケズリ。内面はナナメハケ。純い橙色を呈す。40は口径20cm。外面はハケをナデ消し内面は下半にタテヘラナデ。



Ph.8 SC02東部土器出土状況（北から）



Ph.9 SC02西部土器出土状況（北から）

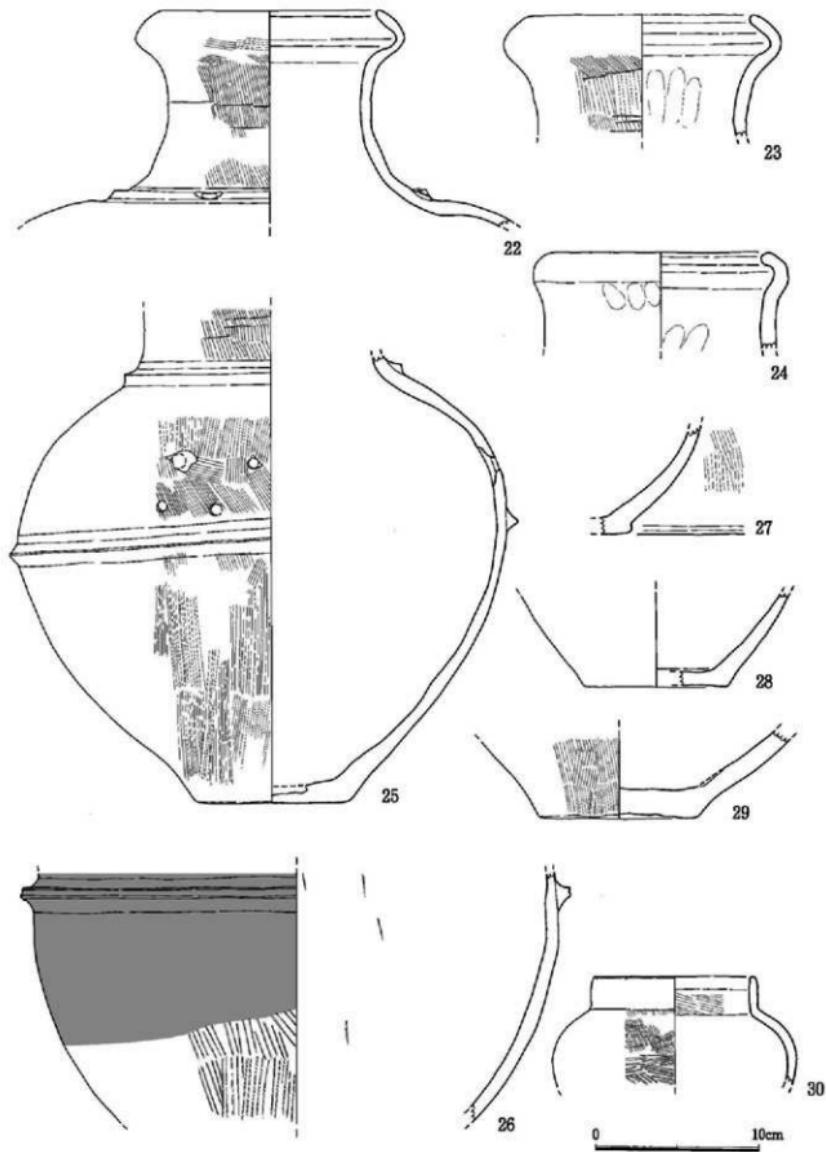


Fig.8 SC02出土遺物実測図. 1 (S=1/3)

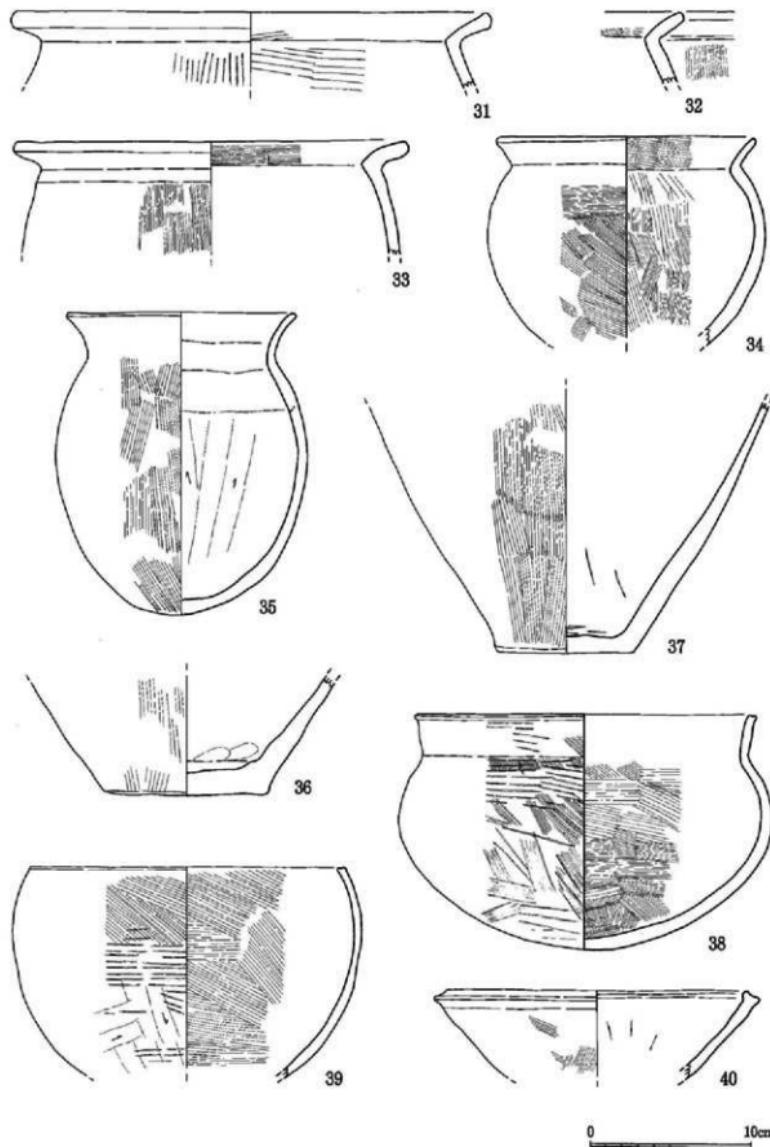


Fig.9 SC02出土遺物実測図. 2 (S=1/3)

鈍い黄橙色を呈す。41は尖底形で口径16.5器高12.3cm。外面はタクキ後上位はヨコナデ下半はヘラケズリ。内面は細かなハケ。底部に焼成前の径1.5cmの1孔を施す。鈍い黄橙色を呈す。42はミニチュア土器の底部で指頭圧痕が多く残る。径4.8cm。鈍い黄橙色を呈す。43は支脚で径10.8cm。指頭圧痕が多く残り、鈍い黄橙色を呈す。44は半島瓦質土器壺の胴部小片で、外面に木目直交の横位のタクキ内面はヨコナデ。胎土は精良で暗灰色を呈す。45は含鉄鉄滓で27×27×18mm 15gを測り、全面に酸化土砂が付着し下面に木炭痕が若干ある。メタル度は低い。44とともに時期を確定できない。46～54は中期後半の混入資料である。

以上混入が多いが時期は遺物のまとまりから後期前半と判断する。

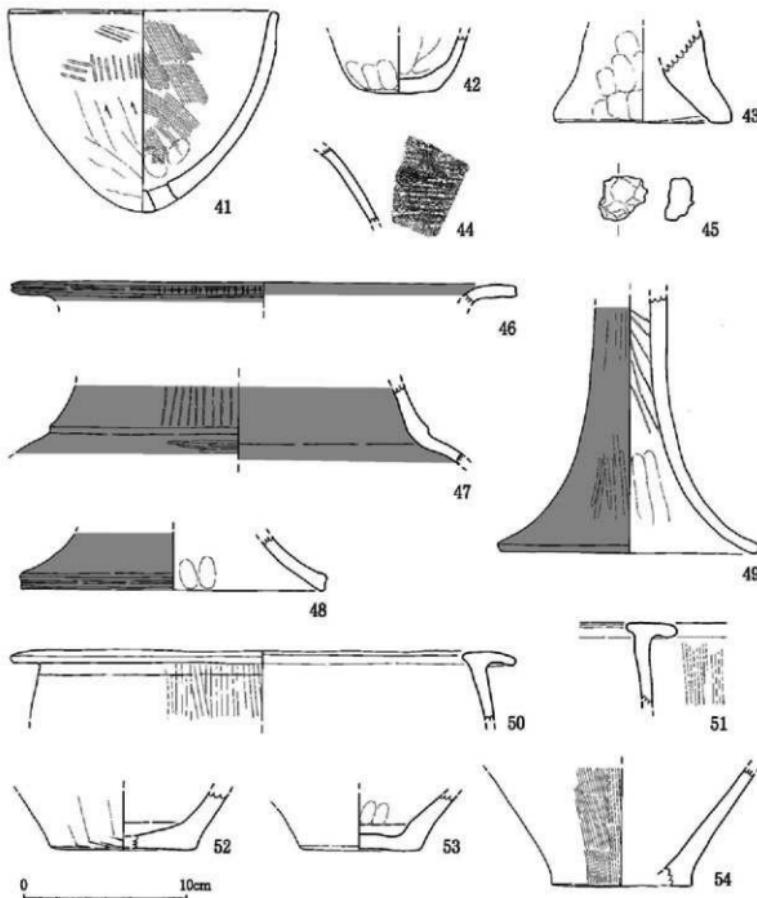


Fig.10 SC02出土遺物実測図. 3 (S=1/3)

2). 土壙 土壙は住居群を囲む様に 3 基確認した。

①SK09 (Fig.11 Ph.11) SK09は住居群の東 2 m 程に位置する。平面は $1.15 \times 0.8m + \alpha$  の円形で、深さ 16 cm を測る。覆土は黒灰色土で、遺物は少量の土器が散漫に出土する。

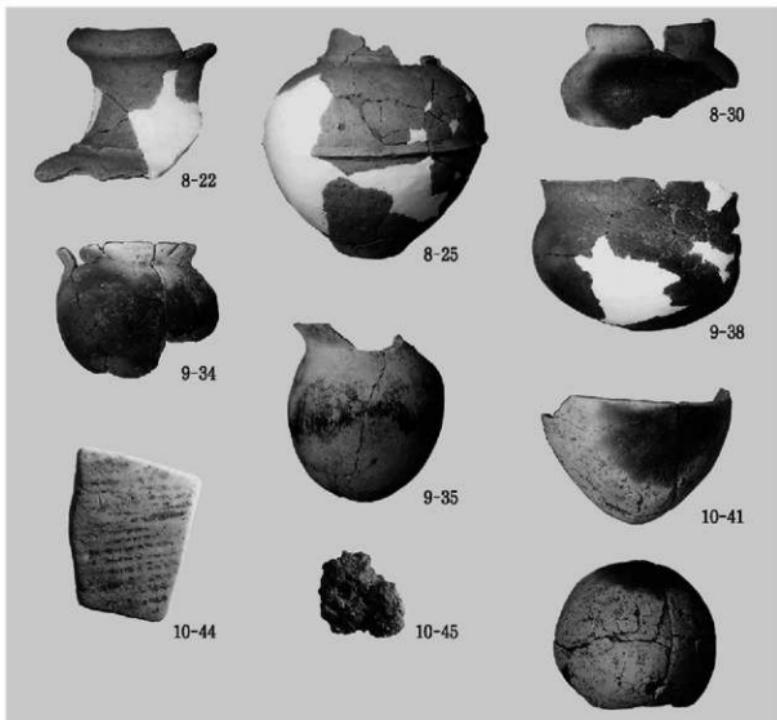
出土遺物 (Fig.12 Ph.13) 55は壺底部で、外面はタテイタナデ内面はタテイタナデ後ナデ。径 7.6 cm で橙色を呈す。56は壺底部で小さな底部から体部が強く開く。外面にタテハケ内面はナデ。径 6.0 cm で橙色を呈す。57は壺脚部片利用の土器片円盤で径 5.3 cm。半折する。以上中期末～後期初を示す。

②SK13 (Fig.11 Ph.12) SK13は住居群の西、SK09の逆位置にある。平面は $1.08 \times 0.94m$  の方円形で、深さ 8 cm を測る。遺物は壺の下半が床から浮いて南部にまとまって出土する。

出土遺物 (Fig.12) 58は平底の壺下半部で、外面は極めて粗いタテハケ後ゆるいナデ下部はケズリ様の粗いヘラナデを施す。内面は指頭圧後ナデ。胴径 25 cm 径底 11 cm で鈍い橙色を呈す。粗い石英粒を多く含む。後期前半を示す。

3). 溝SD01 (Fig.11 Ph.13) 溝SD01は住居群の東 8 m 程の位置に、SC03・04 同様稜線（地山の土層堆積）に並行に延びる。幅 1.25 m、深さ 10 cm を測る。

出土遺物 (Fig.12) 59は丹塗磨研の高杯脚部で外面端部が肥厚し、以上にタテハケを施し外面のみに丹塗を施す。内面端部にはヨコハケを残す。60は小型の鉢か袋状口縁の小片。径 14.4 cm で内外をナ



Ph.10 SC02出土遺物

デ。橙色を呈し、粗い石英粒を多く含む。61～63は甌で、61・62は底部。61は径8.6cmの平底で外面にタテハケ。鈍い黄橙色を呈す。62は径8.2cmの浅い上げ底で外面にタテハケを施し、被熱で器壁が荒れる。外面は橙～暗桃色、内面は褐灰色を呈し、石英粒を多く含む。63は口径24cmの如意形口縁の下端に刻目を施す。外面はヨコ・ナナメの不定方向の条痕様のハケを施し、下半は被熱で著しく器壁が剥離する。内面はヨコナデで口縁部にヨコハケが残る。鈍い褐色を呈し、粗い石英粒を多く含む。64は鋸造鉄斧の袋下端部の小片で現況で2.9×1.8cm、最大厚で6mmを測る。加工痕は無い。以上前期前半から混在するが中期末～後期初を中心とする。

4). 柱穴出土遺物 (Fig.13 Ph.13) 65～68は中期後半・69～71は後期の資料である。65は丹塗磨研の甌で口径32cm。口唇に凹線を、口縁下に「M字」突帯を施す。胎土は精良で橙色。66・67は同個体と思われる甌で、口径24.6cm。外面にタテハケ内面はタテナデ口縁内外はヨコナデ。67は底径7cm。平底で外面にタテハケ。内面は器壁が剥離。鈍い赤褐～橙色を呈し、粗い石英粒を多く含む。68は甌で口径26cm。口唇に沈線、頸部に三角突帯を配すると思われる。

外面はヨコナデ内面はヨコイタナデ後ゆるくケンマ。胎土はカクセン石を含み鈍い褐色を呈す。69は小型高坏の坏部で口径19.5cm。体外面は極めて粗いタテハケ内面はヨコ・ナナメイタナデ後粗くナデ。鈍い橙色を呈し、粗い石英粒を多く含む。70は甌で口径22cm。口唇は丸く仕上げ外面にタテハケ後内外を緩くナデ。鈍い褐色を呈す。71は口径37cmの甌。口唇に沈線を施し下に三角突帯を配す。内外面にヨコナデ。鈍い橙色を呈し、カクセン石を含む。

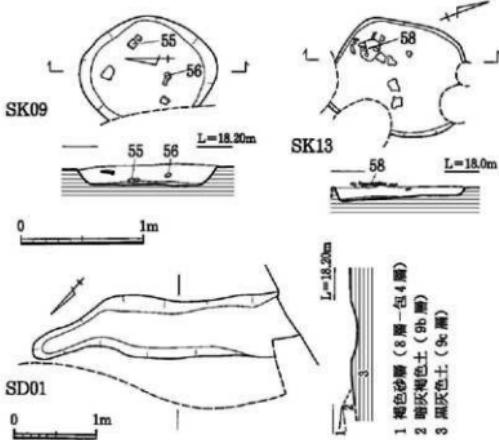
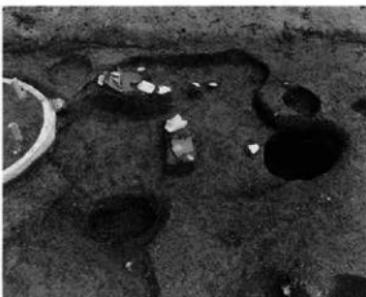


Fig.11 SK09・13・SD01実測図 (S=1/40・1/60)

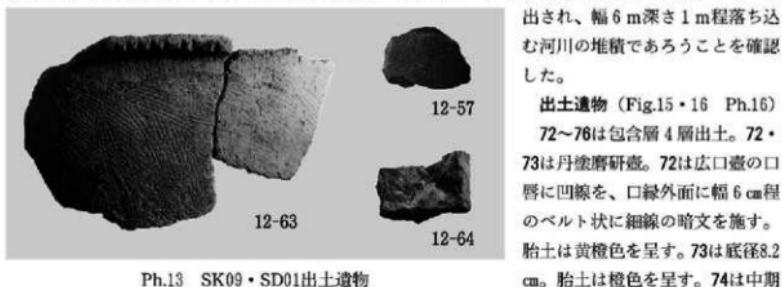


Ph.11 SK09 (西から)



Ph.12 SK13 (東から)

5). 包含層 (Fig.14 Ph.14・15) 調査区下面の造構検出面である灰褐色混土粗砂礫（7層）・黄褐色粗砂礫層（8層）は遺物を包含しており（包含層3・4層）、期間の関係から、遺物の目立つ南西部を中心に確認調査を行った。7層では中期後半～後期前半の、8層では中期後半の資料が中心に検出され、幅6m深さ1m程落ち込む河川の堆積であろうことを確認した。



#### 出土遺物 (Fig.15・16 Ph.16)

72～76は包含層4層出土。72・73は丹塗磨研轢。72は広口壺の口唇に凹線を、口縁外面に幅6cm程のベルト状に細縦の暗文を施す。胎土は黄橙色を呈す。73は底径8.2cm。胎土は橙色を呈す。74は中期

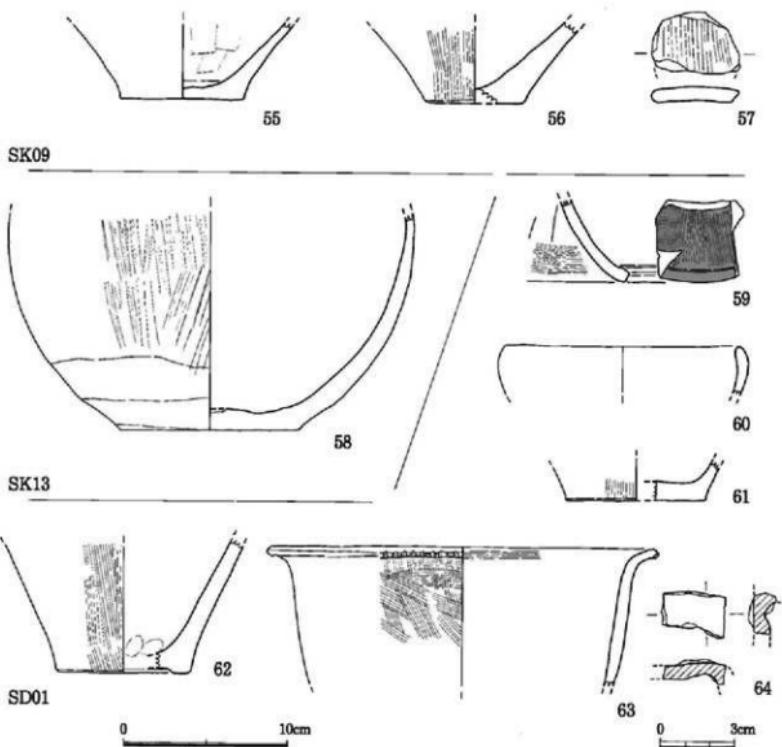


Fig.12 SK09・13・SD01出土遺物実測図 (S=1/3・64-1/2)

前半の「鶴先」口縁壺で外面に黒色顔料を塗布し暗灰褐色、胎土は鈍い橙色。75は底径9.2cmの壺底部で外面にタテハケ。76は疊砂岩礫の叩石で、 $7.9 \times 6.8 \times 2.9$  cm 177 g。全周と片面に敲打痕。被熱し赤変。77~93は包含層3層出土。77~86は中期資料。77は壺で口唇に凹線と刻目。外面は黒色顔料を塗布し黒褐~暗灰褐色、胎土は鈍い橙色。78は壺胴下半で、外面にタテハケ。底径8 cm。鈍い黄橙色。79~86は壺。79は口縁上面に焼成前の刻点3点を施す。外面に煤が付着。橙色。80は丹塗りで口径26.4 cm。口唇に沈線を口縁上面に幅3cm程のベルトに細線暗文を施す。81は口径25.6cm。外面にタテハケ後全体に緩いナデ。鈍い赤褐色。82は口径23cm。外面にタテハケ。83は口径30cm。外面に粗いタテハケ後全体に緩いナデ。煤が部分的に付着し暗灰褐色。84は口径30cm。外面にタテハケ口縁内外はヨコ

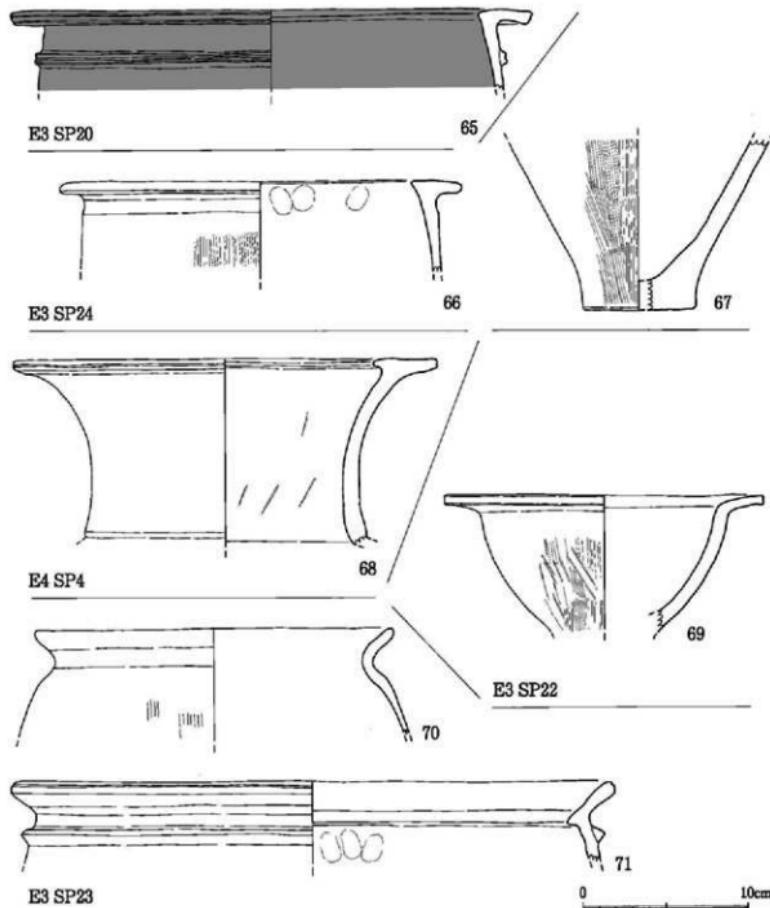


Fig.13 SP出土遺物実測図 (S=1/3)

ナデ内面はイタナデ後ヨコナデ。鈍い黄橙色。86は口径30cm。外面にタテハケ後全体に緩いヨコナデ。鈍い橙色で外面に煤が付着。85は口径28.4cm。外面に粗いタテハケ後緩いナデ口縁内外はヨコナデ内面は丁寧なタテナデ。外面は被熟し橙色。87~93は後期資料。87~89は壺。87は直口口縁で口径8.2器高16.6cm。外面は粗いタテハケ胴下半はケズリ様に、肩部に焼成前の3連のヘラ書き弧線文を段違いに施す。外底に軽圧痕。内面は緩いナデ。黄橙色。88は口径17cm。外面はタテハケ後緩いヨコナデ口縁内外はヨコナデ内面は粗いヨコハケ後緩いヨコナデ。黄橙色。89は口最大径20.2cm。外面は2種のタテハケ後全体を緩くナデ。胎土は精良で橙色。90・91は甌。口唇は丸く仕上げ、90は口径31cm。外面にタテハケ後緩いナデ内面口縁はヨコハケ以下はヨコイタナデ後緩いヨコナデ。鈍い黄橙色。91は口径23.2cm。外面は摩滅で不明。肩部内面はヨコイタナデ後緩いナデ。鈍い黄橙色。92は支脚で径8cm。内外を指頭圧後緩いナデ。鈍い黄橙色。93は鉢か壺の袋状口縁で口径16.4cm。外面は摩滅、内面は粗いヨコナデ。胎土にカクセン石を含み鈍い黄橙色。以上中期前半から後期前半の時期を示す。

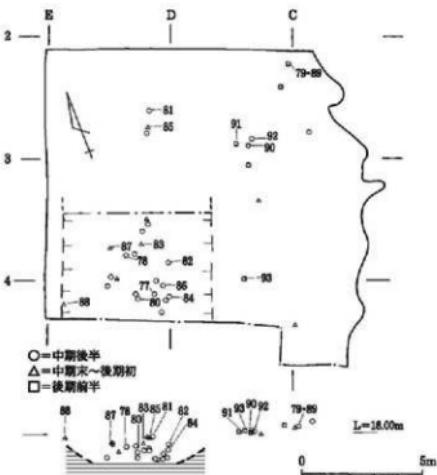


Fig.14 下面包含層3・4層遺物分布図 (S=1/200)



Ph.14 南西部包含層4層掘削状況（北から）

#### 6). その他の資料

(Fig.17・18 Ph.17・18)

Fig.17・18は後世造構への混入資料である。94~98は板付I式～板付IIa式資料。94~96は如意形口縁の甌。94は口唇全面に刻目を施し、外面はナナメ内面はタテナデを施す。橙色を呈す。95は口唇下半に刻目を施し、内外面はナデる。橙色を呈す。96は口唇下半に刻目を施し、外面は条痕様の不定方向ハケを施す。口縁内面はヨコハケ以下はタテ指頭圧後全体をナデる。鈍い橙色を呈す。97・98は壺肩部で、97は外面研磨後沈線上下に貝殻腹縁による羽状文を施し、橙色を呈する。98は同様にヘラ書きの有軸羽状文を施し、外面は鈍い黄橙色、内面は灰褐色を呈する。99は前期末の三角口縁甌で、口唇に刻目を施す。鈍い黄橙色を呈する。



Ph.15 包含層3層土器79出土状況（南から）

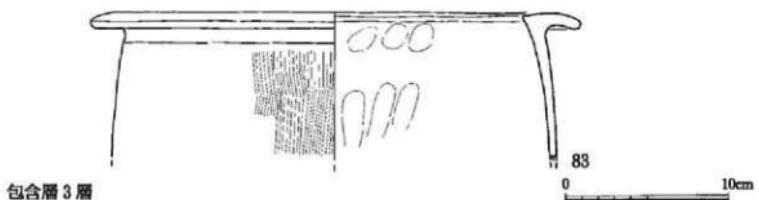
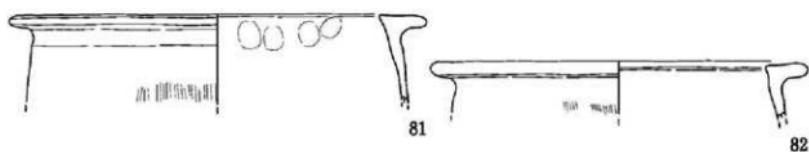
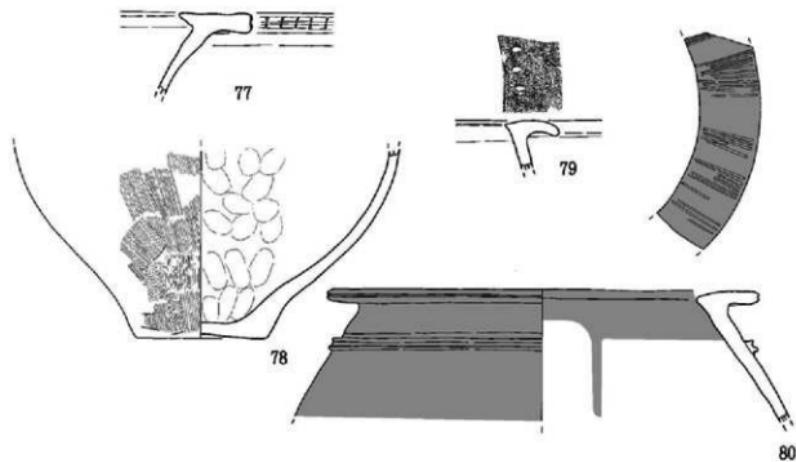
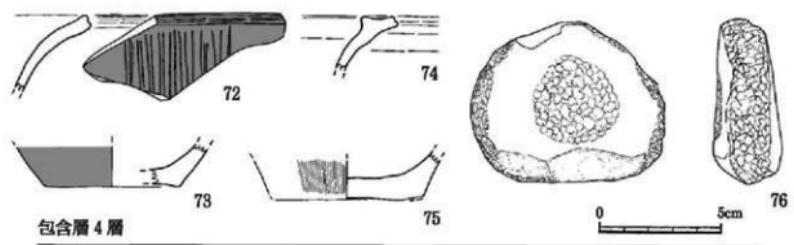


Fig.15 包含層 3・4 層出土遺物実測図。1 (S=1/3・76-1/2)

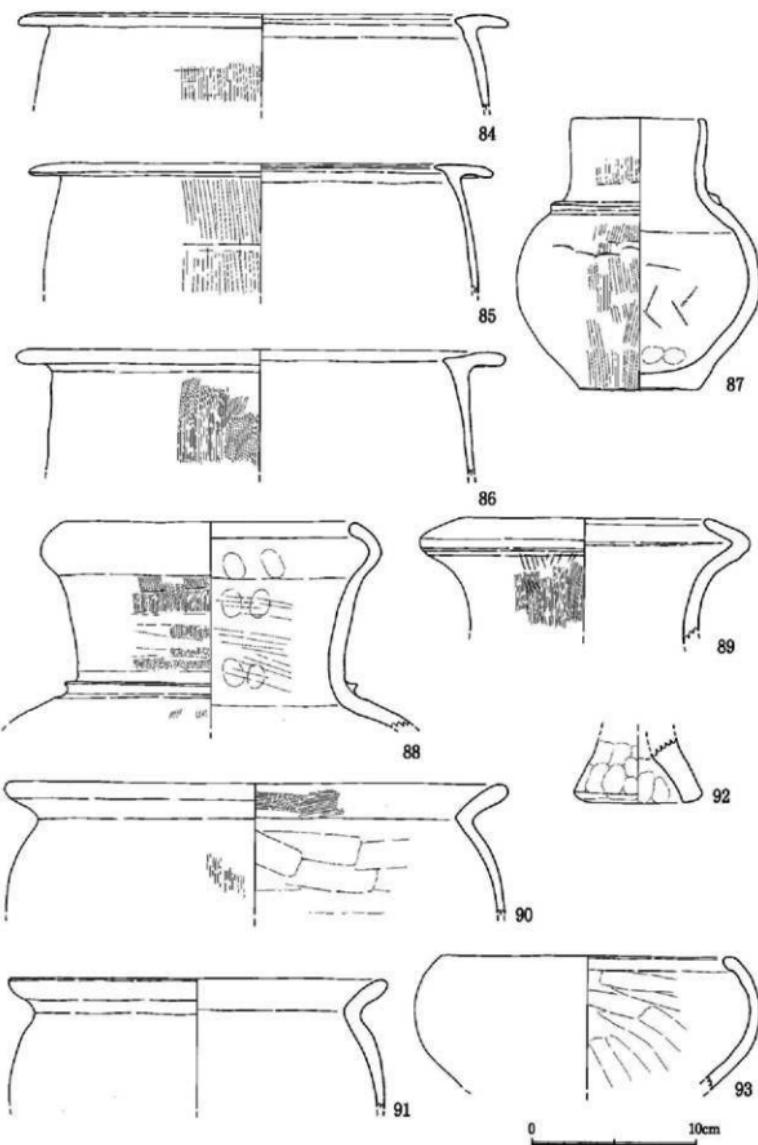
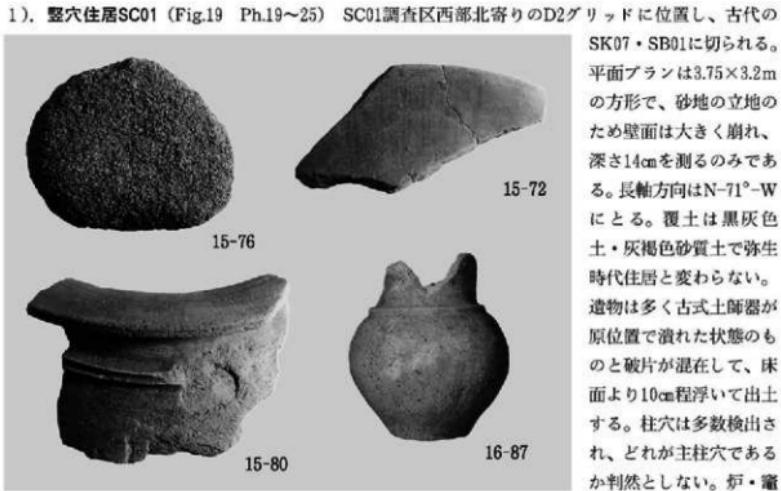


Fig.16 包含層3層出土遺物実測図. 2 (S=1/3)

101～104は中期資料。101は如意形口縁甕で内外面をヨコナデ後上面に2条のヘラ刻目。橙色で赤色粒を含む。102は大形甕の口縁で内外面をヨコナデ。鈍い橙色。103は支脚で径14.4cm。外面は指頭圧タテハケ後緩いナデ内面に絞り痕が残る。鈍い黄橙色で赤色粒を含む。104は器台で外面はタテハケ内面はヘラナデ。橙色。105は壺で、胴径33cm。外面はタテハケ後ヨコナデ内面は指頭圧後イタナデ。鈍い黄橙色で赤色粒を含む。106は壺口縁で、口最大径11cm。外面は粗いタテハケ後ヨコナデ内面はヨコナデ。鈍い橙色。107は甕で口径30cm。外面はタテハケ内面は口縁はヨコハケ以下にナデ。橙色。108は鉢で口径13cm高8.1cm。外面は指頭圧後粗いナデ内面はイタナデ後ヨコナデ。鈍い黄橙色。109・111～113は腰岳産黒耀石製。109は石鏡で $18.5 \times 16.9 \times 3.5$ mm 8.9gを測る。若干風化が進む。110はサヌカイト製の石匙で横長剥片の下端に裏剥離面側から刃部を形成する。現況で $41 \times 28 \times 6$ mmを測る。若干風化が進む。112・113は角礫素材の残核で112は $26 \times 28 \times 19$ mmを測る。上下に自然面を残し主に横から剥離する。風化は無い。113は $42 \times 32 \times 24$ mmを測る。上下と2側面に自然面を残し上下から階段状剥離を施す。風化は無い。114は今山玄武岩の亜角礫隅角の剥片を用いた嘴状礫器で $94 \times 75 \times 42$ mmを測る。先端部を両面剥離によって尖頭状に形成し、敲打により先端部が摩滅する。背部も両面の階段状剥離によって整形し、敲打により刃潰しを行う。115は頁岩質砂岩製の石包丁で淡黃灰色を呈す。116は石英長石斑岩製の砥石の隅角部分で上下と小口面上に砥面を形成する。側面は敲打・削りにより粗く整形される。明黄白色を呈し、上面は被熱により黒灰色を呈す。鋳型の転用の可能性がある。以上前期初頭から後期前半の時期を示す。

### 3. 古墳時代の調査

古墳時代の遺構は6層黒灰色土中から掘り込まれ、上面で土壙を1基と柱穴、6層下面で竪穴住居を1軒、土壙3基・柱穴を調査区西部を中心に検出した。



Ph.16 包含層3・4層出土遺物

は検出されなかった。

出土遺物 (Fig.20~23 Ph.26・27) 117~124は壺で、117はV様式系。口径20cm。胴外面タテハケ後ヨコハケ内面ケズリ口縁内外ヨコナデ。橙色。118は布留1式系で口径30cm。内外ヨコナデ後外面に横書き波状文。カクセン石含み灰白色。119~124は山陰系。119は口径23cm。口縁内外ヨコナデ内面頸部タテナデ胴内面ケズリ。赤色粒含み橙色。120は口径22.6cm。口縁内外ヨコナデ胴外面タテハケ後肩部2条回転ハケ頸部ナデ消し内面ケズリ。赤色粒含み純い黄橙色。121は口径13cm。口縁内外ヨ

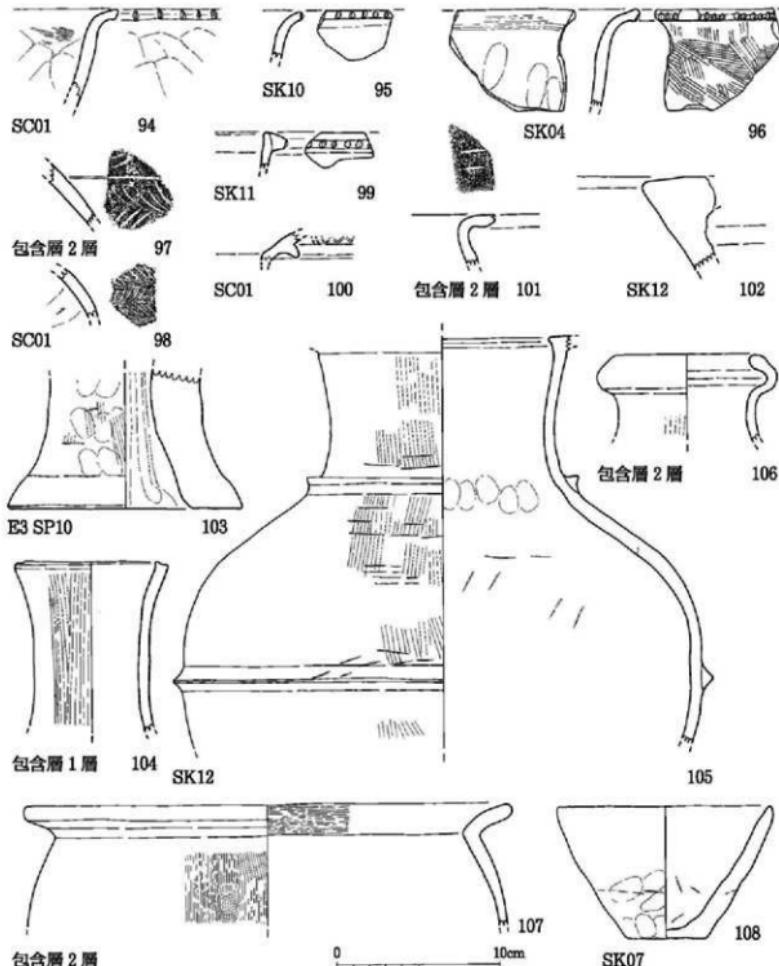


Fig.17 その他の弥生時代土器実測図 (S=1/3)

コナデ。赤色粒含み黄橙色。122は口径21cm。口縁内外ヨコナデ内面へラ当て痕。外面2箇所器壁を剥離。赤色粒含み浅黄橙色。123は口径9.6器高16cm。口頭部内外ヨコナデ胴外面不定方向のハケ後肩部に1条回転ハケ内面ケズリ後ナデ。カクセン石含み鈍い黄橙色。124は口径28.7cm。口頭部外面ヨコナデ内面ヨコハケ後部分的にヨコナデ肩部外面タテ・ナナメハケ後肩部にヨコハケ内面ケズリ。橙～黄橙色内面下半は黒変。125は高環脚部。径11cm。外面タテケズリ後ヨコナデ内面ヨコケズリ後端部近くをナデ。鈍い黄橙色。126は堆で口径12.6器高10.4cm。口頭部内外ヨコナデ胴外面下半ケズリ後ナデ内面指頭圧後ナデ。胎土精良で橙～黄橙色。127は短頸壺で外面タテハケ口縁内面ヨコハケ後ナデ胴部内面ナナメハケ後頭部下と胴の一部ヨコケズリ。胎土精良で橙色。128～144は甕で128・129はV様式系。128は口径22.5cm。口縁内外ヨコナデ胴外面タテハケ内面ナナメハケ後ナデ。橙色で内面胴部は鈍い黄橙色。129は口径15cm。外面はタテハケ後ナデ内面口頭部ヨコナデ胴はケズリか。外面黄橙

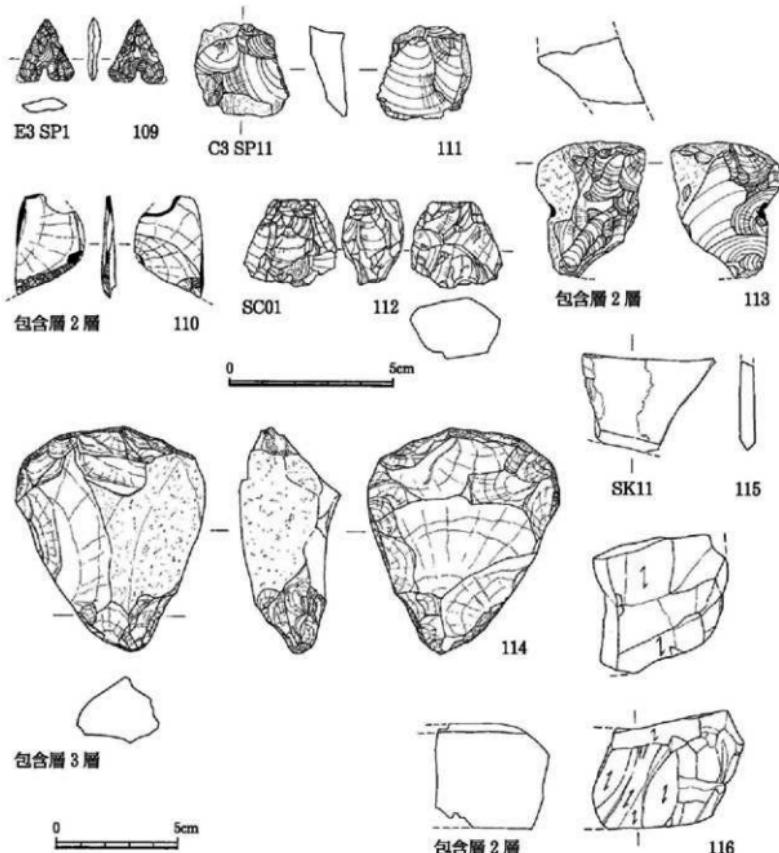
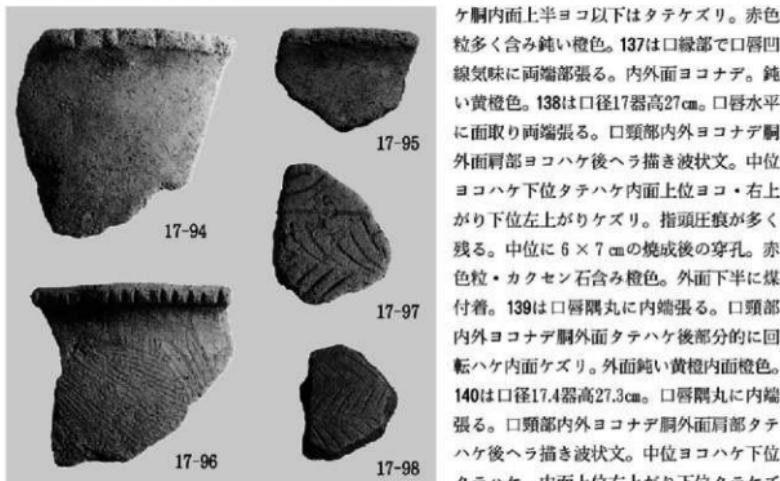


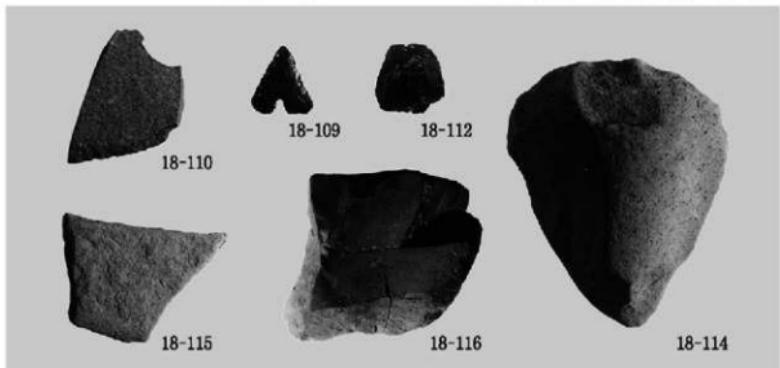
Fig.18 その他の弥生時代石器実測図 (S=2/3・109・113~115-1/2)

色内面橙色。130～140は布留式系。130は口径15.2cm。口頸部内外ヨコナデ洞外面ナメハケ内面ケズリ。肩部に焼成後のかなたな穿孔。鈍い橙～灰褐色。外面下半に煤付着。131は口径15cm。口頸部内外ヨコナデ外面肩部タテハケ後ヨコナデヘラ描き波状文を以下はタテ・ヨコハケ後タテハケ。内面ケズリ。外面浅黄橙内面鈍い黄橙色。外面下半に煤付着。132は口径15.7cm。口頸部内外ヨコナデ洞外面タテハケ後ナデ内面ケズリ。鈍い黄橙色。133は口径17.2cm。外面口頸部ヨコナデ洞外面ヨコハケ後ナデ肩部に沈線。口縁内面はヨコナデ類部タテナデ以下にケズリ。外面橙～灰褐色内面橙～鈍い黄橙色。外面下位に煤付着。134は口径内外ヨコナデ洞外面タテナデ内面ケズリ。カクセン石含み灰白～浅黄橙色。135は口径17.3cm。口頸部内外ヨコナデ洞外面タテハケ後ナデ内面ケズリ。赤色粒含み鈍い黄橙色。136は口径14.4cm。口頸部内外ヨコナデ外面肩部ヨコハケ後沈線1条施し以下はタテ・ナメハケ洞内面上半ヨコ以下はタテケズリ。赤色粒多く含み鈍い橙色。137は口縁部で口唇凹線気味に両端部張る。内面ヨコナデ。鈍い黄橙色。138は口径17器高27cm。口唇水平に面取り両端張る。口頸部内外ヨコナデ洞外面肩部ヨコハケ後ヘラ描き波状文。中位ヨコハケ下位タテハケ内面上位ヨコ・右上がり下位左上がりケズリ。指頭圧痕が多く残る。中位に6×7cmの焼成後の穿孔。赤色粒・カクセン石含み橙色。外面下半に煤付着。139は口唇隅丸に内端張る。口頸部内外ヨコナデ洞外面タテハケ後部分的に回転ハケ内面ケズリ。外面鈍い黄橙内面橙色。140は口径17.4器高27.3cm。口唇隅丸に内端張る。口頸部内外ヨコナデ洞外面肩部タテハケ後ヘラ描き波状文。中位ヨコハケ下位タテハケ。内面上位右上がり下位タテケズリ。底部に指頭圧痕。赤色粒含み外面橙色



Ph.17 その他の弥生土器

ケ洞内面上半ヨコ以下はタテケズリ。赤色粒多く含み鈍い橙色。137は口縁部で口唇凹線気味に両端部張る。内面ヨコナデ。鈍い黄橙色。138は口径17器高27cm。口唇水平に面取り両端張る。口頸部内外ヨコナデ洞外面肩部ヨコハケ後ヘラ描き波状文。中位ヨコハケ下位タテハケ内面上位ヨコ・右上がり下位左上がりケズリ。指頭圧痕が多く残る。中位に6×7cmの焼成後の穿孔。赤色粒・カクセン石含み橙色。外面下半に煤付着。139は口唇隅丸に内端張る。口頸部内外ヨコナデ洞外面タテハケ後部分的に回転ハケ内面ケズリ。外面鈍い黄橙内面橙色。140は口径17.4器高27.3cm。口唇隅丸に内端張る。口頸部内外ヨコナデ洞外面肩部タテハケ後ヘラ描き波状文。中位ヨコハケ下位タテハケ。内面上位右上がり下位タテケズリ。底部に指頭圧痕。赤色粒含み外面橙色



Ph.18 その他の弥生時代石器

内面鈍い橙色。外面下間に煤付着。141は庄内式系の肩部片で外面左上がりの細かなタタキ内面頸部タテナデ以下にケズリ。外面鈍い黄橙色内面浅黄橙色。142はV様式系の胴部片で外面左上がりのタタキ内面ナナメハケ。カクセン石含み褐灰～灰黄褐色。143は壺で口径11cm。口頸部内外ヨコナデ胴内面ヨコケズリ。赤色粒含み橙色。144は山陰系の肩部片で外面ハケ工具の有軸羽状文内面ヨコケズリ。外面鈍い黄橙色内面鈍い橙色。145は吉備系で口径12cm高15cm。口縁外回転ハケで多条沈線とする。口頸部内外ヨコナデ胴外面タテハケ後上・下位をナデ内面ヨコケズリ。肩部に焼成前の2点の刺突がある。赤色粒多く含み鈍い黄橙色。

Fig.17-100は吉備系高壺の环屈曲部。外面突堤上に櫛描き波状文の端部が残る。灰白～浅黄橙色。146は半島陶質土器の底部で外面に木目直交のタタキ内面は指頭圧後回転ナデ。細砂粒を少量含み灰色。147は壺胴部片利用の土器片円盤。5.4×4.8×0.4cm。148は細粒砂岩製の磁石。上面のみ砥面が残り他は破断。47×54×20mm。暗灰色。以上久住編年のII-C期を中心とする。

2). 土壙 土壙は住居を囲むように、西部を中心に上面で2基、下面で3基確認した。  
①SK10 (Fig.24 Ph.30) 下面北西端に位置し、平面は $1.05 \times 0.92m + \alpha$ の隅丸方形で、深さ21cmを測る。6d層からの掘り込みで覆土は黒灰色土。遺物は少量の土器が散漫に出土する。

出土遺物 (Fig.25) 149はV様式系の壺で口径16.4cm。内外面ナデ。橙色を呈す。  
②SK11 (Fig.24 Ph.28・29) SC01の西2mに位置し、平面は $2.16 \times 1.13m$ の楕円形で、深さ13cmを測る。中央部に10cm程浮いて甕の破片がまとまって出土する。

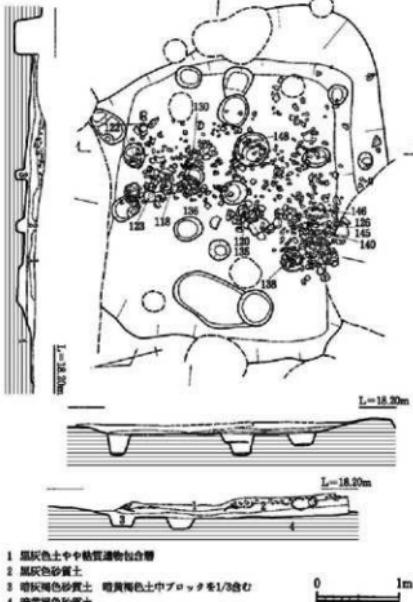
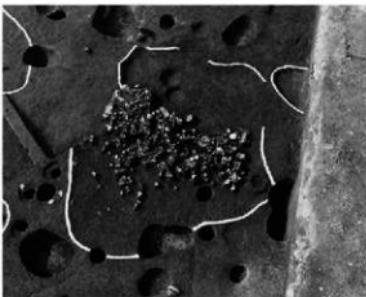


Fig.19 SC01実測図 (S=1/60)



Ph.19 SC01土層断面 (北東から)



Ph.20 SC01 (東から)



Ph.21 SC01土器出土状況（南から）

出土遺物 (Fig.25 Ph.33)  
150は布留式系甕で口唇を水平に面取り両端張る。内外面にナデ。黄橙色。151は在地系の壺頭部で内外面にハケ頸部突帯に刻目。純い黄橙色。152はV様式系の甕で口径20.6cm。外面口縁タテハケ後ナデ胴部平行タタキ内面細かなハケ。赤色粒含み橙色。153は在地系の壺。口径23.6cm 全面にハケ後外底近くをケズリ。純い橙色。154はV様式系の壺で口径14.5器高33.5cm。口縁内外ハケ後内面ナデ外面胴上位平行タタキ後ハケ下位ケズリ様のタテイタナデ内面上位ヨコハケ



Ph.22 南西部土器出土状況（南西から）



Ph.23 北東部土器出土状況（西から）



Ph.24 陶質土器146出土状況（西から）



Ph.25 SC01完掘状況（北から）

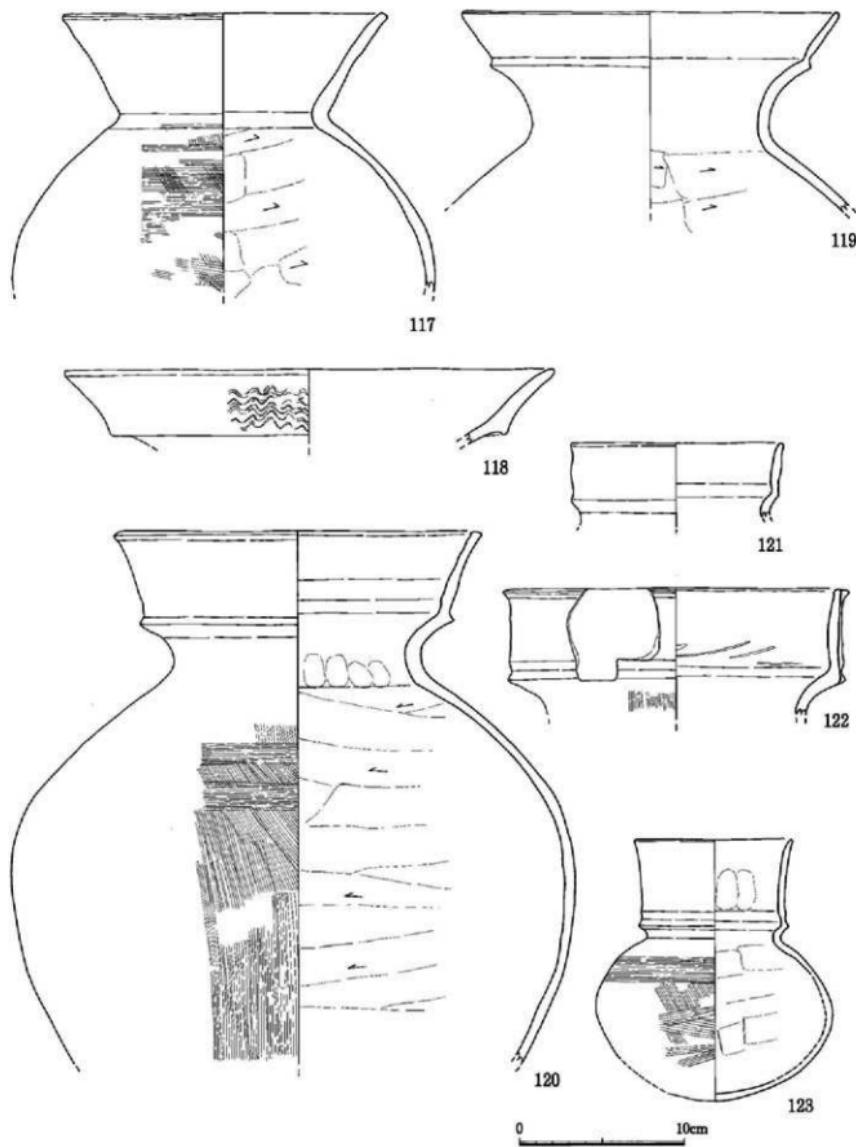


Fig.20 SC01出土遺物実測図. 1 (S=1/3)

下位タテハケ。底部に焼成後の径4cmの穿孔。鈍い黄橙色を呈す。II B期か。  
 ③SK12 (Fig.24 Ph.31・32) SK11の西1mに位置し、平面は1.92×1.85mの不整形で、深さ21cmを測る。南部の2箇所に10~20cm程浮いて土器片がまとまって出土する。

出土遺物 (Fig.25) 155は山陰系甕で内外面にナデ。鈍い橙色。156は在地系甕で外面にハケ後ナデ内面ナデ。赤色粒含み浅黄橙色。157は布留式系甕で口縁内外をヨコナデ。赤色粒含み橙色。158は在地系の甕で面取りした口唇にハケ工具の刻目外面にタテ内面にヨコハケ後内外をナデ。赤色粒含み浅黄橙色。159は壺胴部片の土器片円盤。径5cm厚6mm。半折する。II C期か。

3). 柱穴・包含層他出土遺物 (Fig.26 Ph.34) 160~163は柱穴出土。160は在地系の大甕。口唇を面取りし内外に粗いハケ。鈍い橙色。161は堆で口径9cm。口縁内外はナデ内面に粘土締ぎ目胴外面上位はタテハケ後ナデ下位はケズリ様のイタナデ胴内面上位はタテナデ下位はヨコケズリ。橙色。162は布留式系甕で口頭部内外をヨコナデ。胴内部ケズリ。外面褐色灰色内面浅黄橙色。163は壺胴部片の土器片円盤。径4.5cm厚6mm。半折する。164・165は包含層2層出土。164は支脚で径15.2cm。外面ナデ内面ヘラナデ。砂粒を多量に含み橙色。165は布留式系甕で口径15.4cm。口縁内面ヨコハケ後内外をナデ胴外表面タテ・ヨコハケ内面ケズリ。赤色粒含み純い黄橙色。166~170は混入資料。166は脚付鉢で口径12.8器高8.8cm。口縁内外ヨコハケ以下外面タテハケ内面タテケズリ。脚部内外ナデ。橙色。167は布留式系甕肩部外面に回転ハケの波状文内面ヨコケズリ。黄橙色。168軟質土器台方形透かし部。

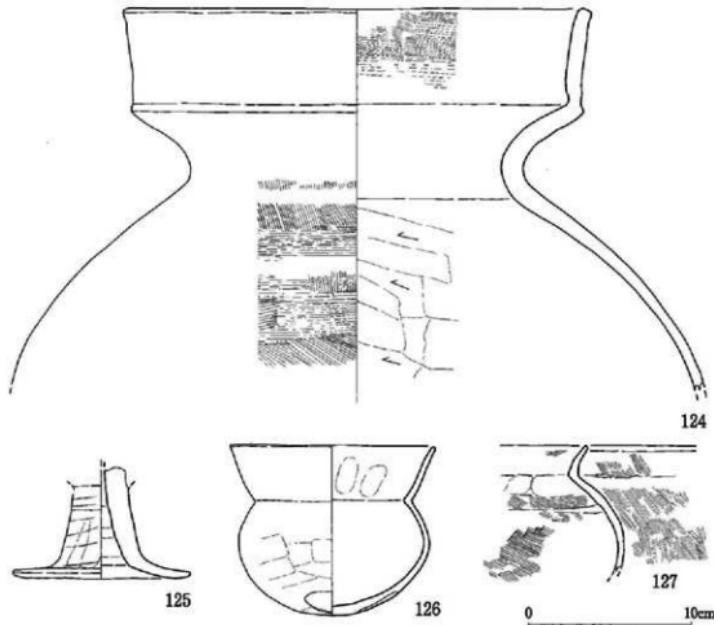


Fig.21 SC01出土遺物実測図. 2 (S=1/3)

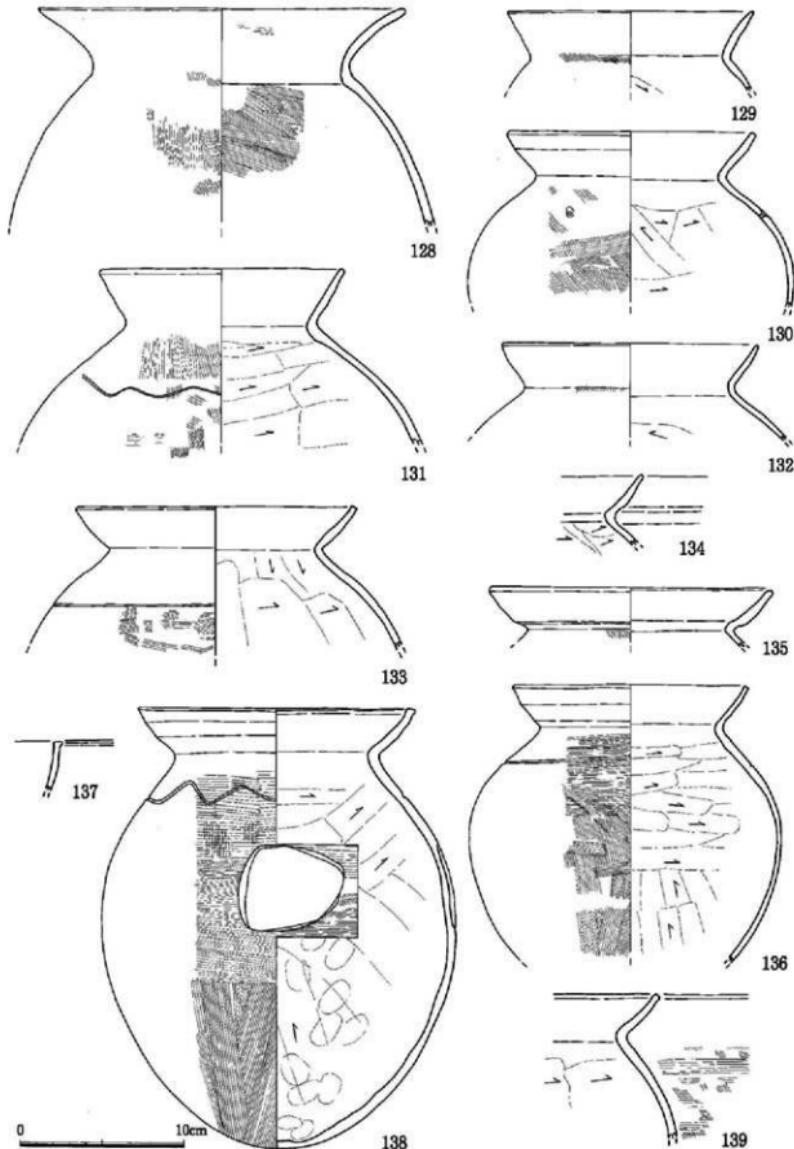


Fig.22 SC01出土遺物実測図. 3 (S=1/3)

内外ナデ胎上精良で橙色。169は弥生後期前半西部瀬戸内系の凹線文甕で口径15.6cm。口唇に凹線・沈線を3条施す。口頭部内外をヨコナデ。胴外面タテハケ。赤色粒含み橙色。170は布留式系甕で口径17cm。口唇面取りし両端張る。口頭部内外をヨコナデ。胴外面タテハケ内部ケズリ。赤色粒含み浅黄橙色。

#### 4. 古代の調査

古代の遺構は3層灰褐色土から掘り込まれると思われるが、下層の6層黒灰色土上面で検出を行った。遺構は4面庇と思われる大形建物1棟を含む掘立柱建物2棟と柱穴、土壙3基を検出した。

1). 掘立柱建物 掘立柱建物はSB01・02の2棟を検出した。南北棟はSB01で、SB02は北東方向の地形に沿い西側に位置する。何れも調査区外に広がり、全容は明らかでない。

①SB01 (Fig.27 Ph.35・36) 中央に位置する南北棟の建物で棟をN-3°-Eにとる。調査時は東西2

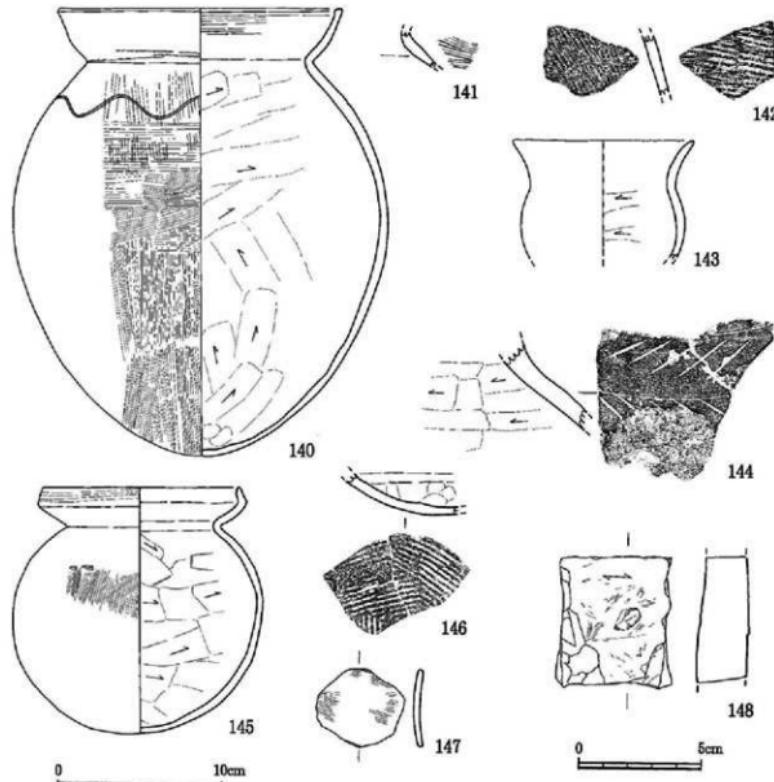
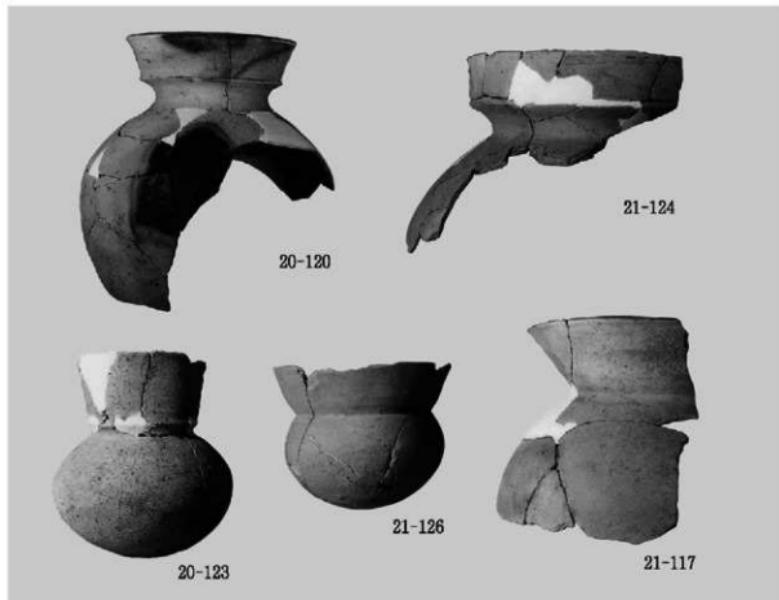


Fig.23 SC01出土遺物実測図. 4 (S=1/3・148-1/2)

面に庇を持ち身舎で2間×7間以上で南北端は不明と考えたが、整理時に、南端近くに平行する二つの柱穴が有り、南東端の柱穴をSK04の覆土とともに掘り誤ったと仮定すれば南端庇の可能性が出てきた。庇を含め4間×7間以上7.1×12.3m以上を想定できる。柱間は身舎と南庇がほぼ2.3m東西庇が1.3～1.6mを測る。堀方は円形で身舎が大きな傾向にある。径45～110cmで深さ40～60cmが多い。柱は径20cm前後を測る。

**出土遺物 (Fig.30 Ph.40)** 171は須恵器の有肩壺か。頸部径15cm内外に回転ナデ。胎土精良。灰色。172・173は土師器。172は壺で口径17.4cm。内外摩滅。赤色粒を含み浅黄橙色。173は高台環で底径7.2cm。内外摩滅。赤色粒を含み鈍い橙色。174は阿高式系の破片を用いた土器片円盤。2.2×2.4×0.8cm。滑石を多量に含み鈍い赤褐色。175・176は含鉄鉄滓でメタル度は低い。175は破断面3面で下面が滴下し気泡が多い。176も破断面3面で上面・顆粒状の断面に鍛造剥片が多く下面は炉底粘土が付着。以上9世紀末～10世紀前半・中頃。177～179はSB01を切るD2SP16出土遺物 (Fig.27 Ph.37・40)。177・178は土師器。177は壺で口径13.6cm器高4.9cm。外面腰部分にヘラナデ外底ヘラ切り。内面回転ヘラ当て後回転ナデ。胎土精良で浅黄橙色。178は壺で口径10.8cm器高2.8cm。外面摩滅。外底ヘラ切り内面回転ナデ。胎土精良で浅黄橙色。179は長門系の縁釉鉢か。内外回転ナデ後オリーブ灰色の薄い施釉。胎土軟質精良で灰黄色。以上10世紀末～11世紀初。

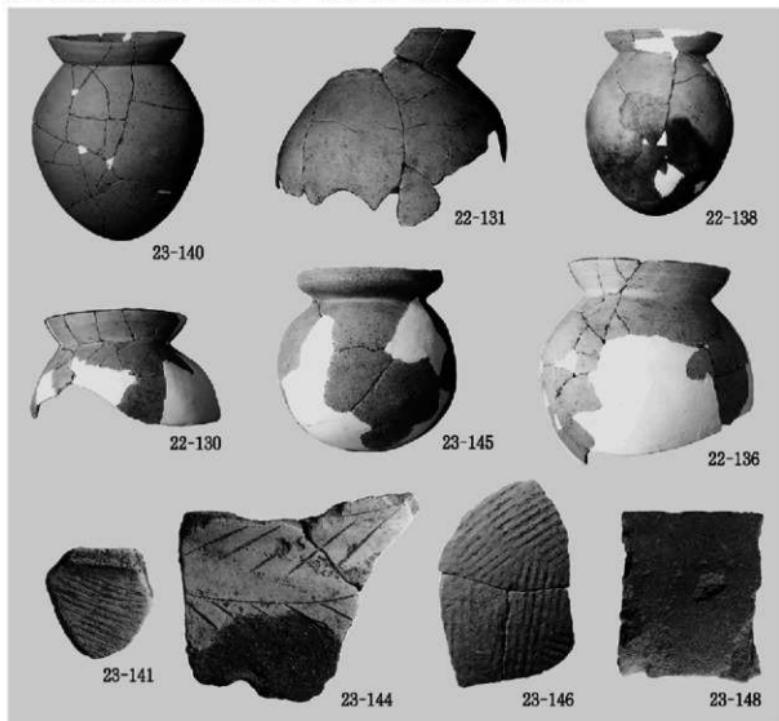
②SB02 (Fig.28) 調査後整理時に想定したものでSB01の西で切り合う。 $2 + \alpha \times 5 + \alpha$ m間の建物で $2.3 + \alpha \times 9.6 + \alpha$ mを測る。南端から2列目に直交する2穴が有り庇の可能性がある。棟をN-18°-Eにとり、地形に沿う。柱間は1.7～2.2mで梁間が狭い。堀方は01より小型の円形で径35～50cm・深さ18～35cmを測る。遺物はヘラ切りの土師器小片が出土する。11世紀か。



Ph.26 SC01出土遺物. 1

2). 土壙 土壙は2基がSB01に切られ、1基がこれに併設する。

①SK02 (Fig.29 Ph.38) SB01の北東に並行して隣接する。雨落ち溝か。平面は $0.83 \times 1.45\text{m}$  +  $\alpha$ の溝状で深さ24cmを測るが、掘り過ぎている。遺物は上面に散漫に出土する。



Ph.28 SK11 (東から)



Ph.29 SK11土器出土状況（南から）

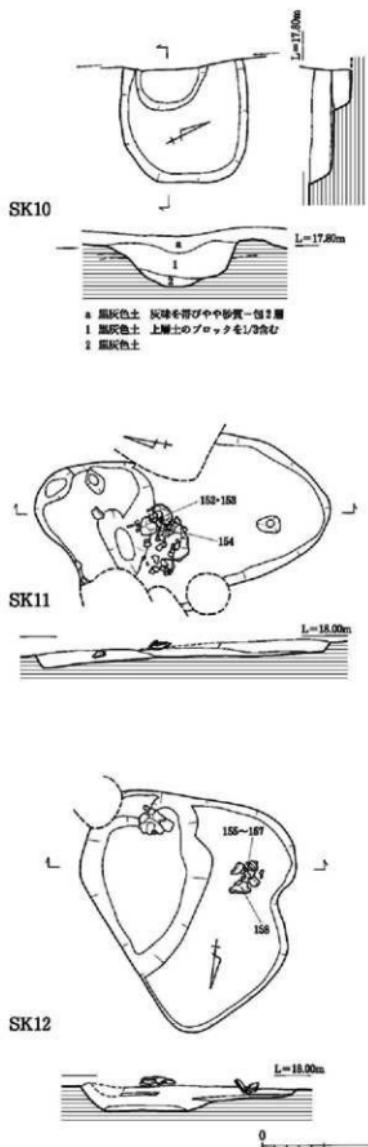


Fig.24 SK10・11・12実測図 (S=1/40)

出土遺物 (Fig.30 Ph.40) 180～182は土師器。180・181は壺底部。外底へラ切り後板圧痕。摩滅する。高台径8.2・8.0cmで浅黄橙色。182は丸底壺で外底に板圧痕。鈍い橙色。183～185は黒色土器。183・184はA類。183は回転ナデ後内面は丁寧な外面は粗なケンマ。184は底径6.6cm内外に回転ナテ。185はB類。内外に回転ナテ。186は含鉄鉢。全面に酸化土砂が付着。メタル度は低い。187は椀形鉢。破面3面で上面は大きな気泡に木炭痕下面は小さな滴下状。SB01と同様か。

②SK04 (Fig.29 Ph.39) SB01の南東部でこれに切られ、1.3×1.96m + α深さ29cmを測る。

出土遺物 (Fig.30 Ph.40) 190は東海系の綠釉皿で内面にヘラ描きの花文を施し内外に灰オリーブ色の施釉。胎土砂質で鈍い黄橙色。10世紀前半～後半か。

③SK07 (Fig.29 Ph.41・42) SB01の下でこれに切られ、4.7×2.75m深さ33cmを測る。

出土遺物 (Fig.30 Ph.40) 188は土師器高台壺。底径9cm。外底へラケズリ内外を回転ナテ。胎土精良で橙色。9世紀。189は土師器皿。口径10cm高1.2cm。外底へラ切りで摩滅。浅黄橙色。10世紀前半～後半。

3) 包含層他出土遺物 (Fig.30 Ph.40) 191～196は包含層1層出土。193は瓦器壺。191～195は土師器。195はヘラ切り後板圧痕。196は椀形鉢。197・198は混入資料で197は細かな斜格子叩き平瓦。198は高麗無釉陶器甕片。外面格子目



Ph.30 SK10 (東から)

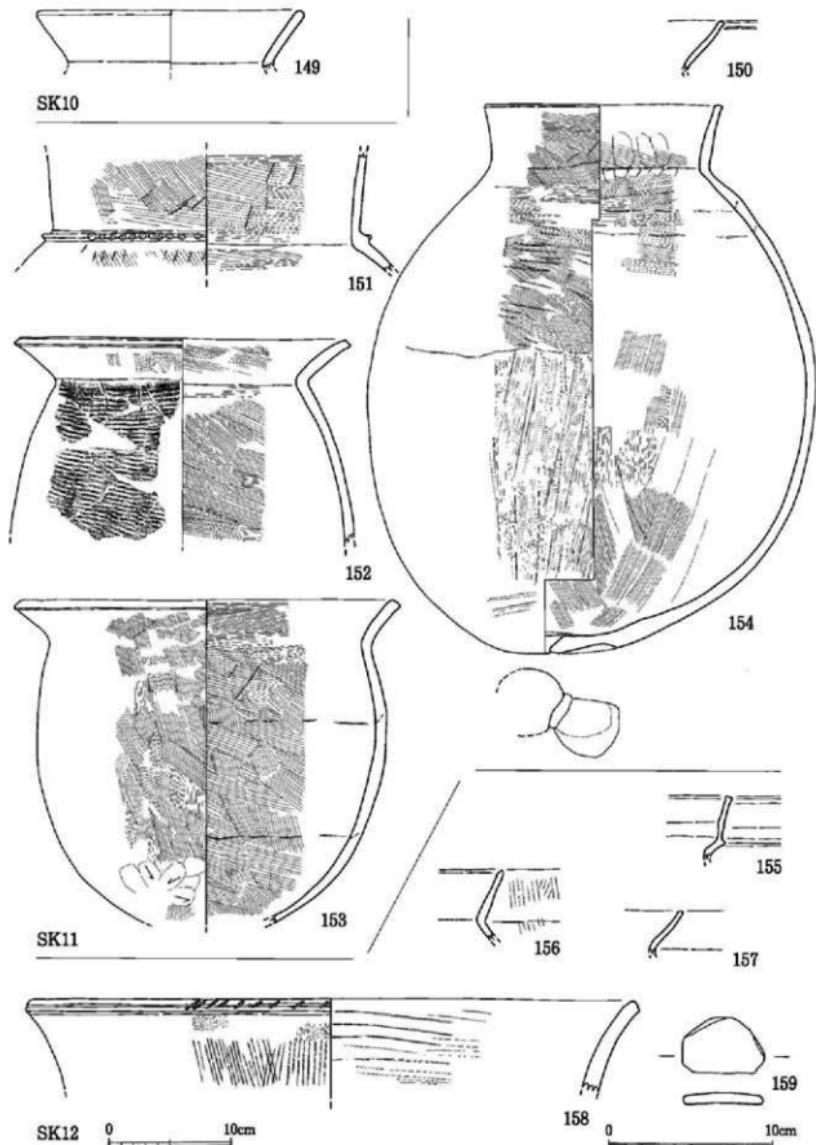
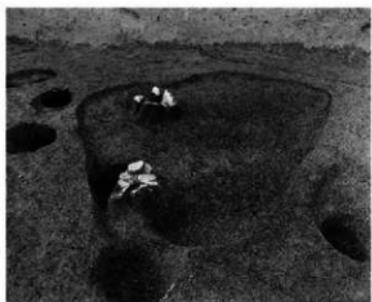


Fig.25 SK10・11・12出土遺物実測図 (S=1/3・158-1/4)

タタキ内面同心円に平行當具痕が重なる。



Ph.31 SK12(東から)



Ph.32 SK12土器出土状況(南から)

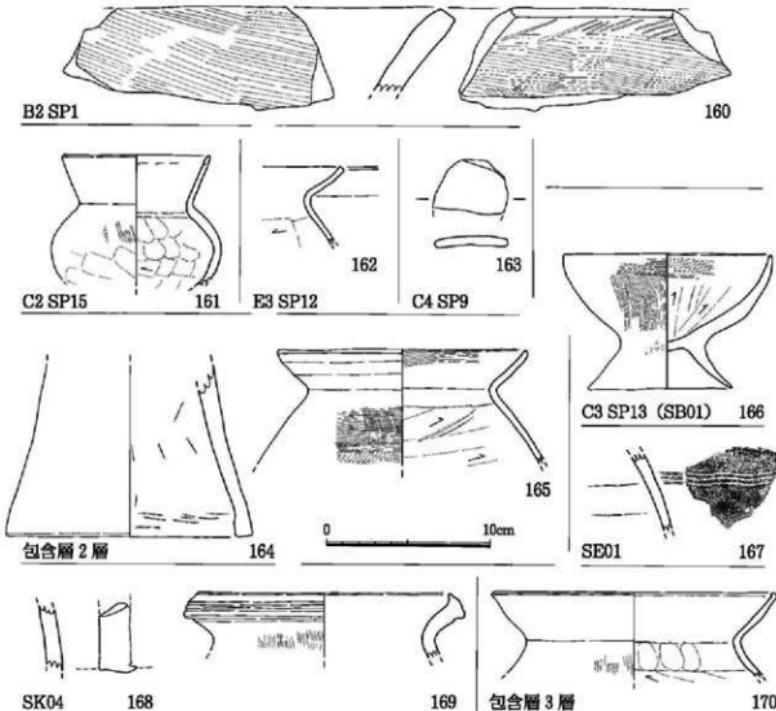
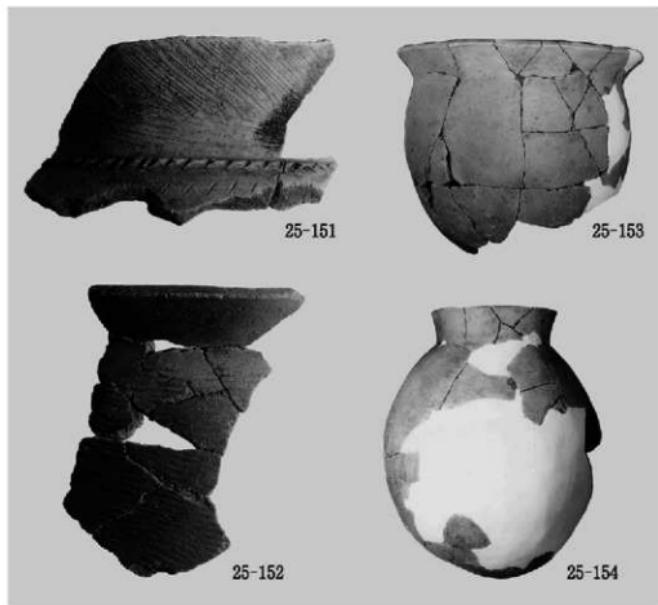


Fig.26 SPその他の出土遺物実測図 (S=1/3)

## 5. 中世の調査

中世の遺構は、調査区東部で検出された井戸状遺構SE01と土壌SK01・柱穴群で、柱穴の大部分はヘラ切りの11世紀代で、糸切りの12世紀代以降は少数である。

1). 井戸状遺構SE01 (Fig.31 Ph.43・44) SE01は調査区北東部のB2グリッドに位置し、平面3.85×3.45mの円形深さ90cm程の擂鉢状の掘方の底に、径1.6m程深さ30cm程円形にさらに掘り下げる。井筒は検出されなかったがテラス部以下がシルト・粗砂層で湧水層と思われる。底面から50cm程上位までが2段目の掘り込みと呼応するよう小単位の埋土となっており、この位置まで曲物か桶の井筒を一段据え、テラス上30cm程まで埋め戻し使用し（9層上面）、廃棄時に抜き取り埋め戻したものと考えられ、青磁の小碗はこの上面に位置し、井筒埋立時に埋納後一気に全体を埋めている。



Ph.33 SK11出土土器



Ph.34 SPその他の出土遺物

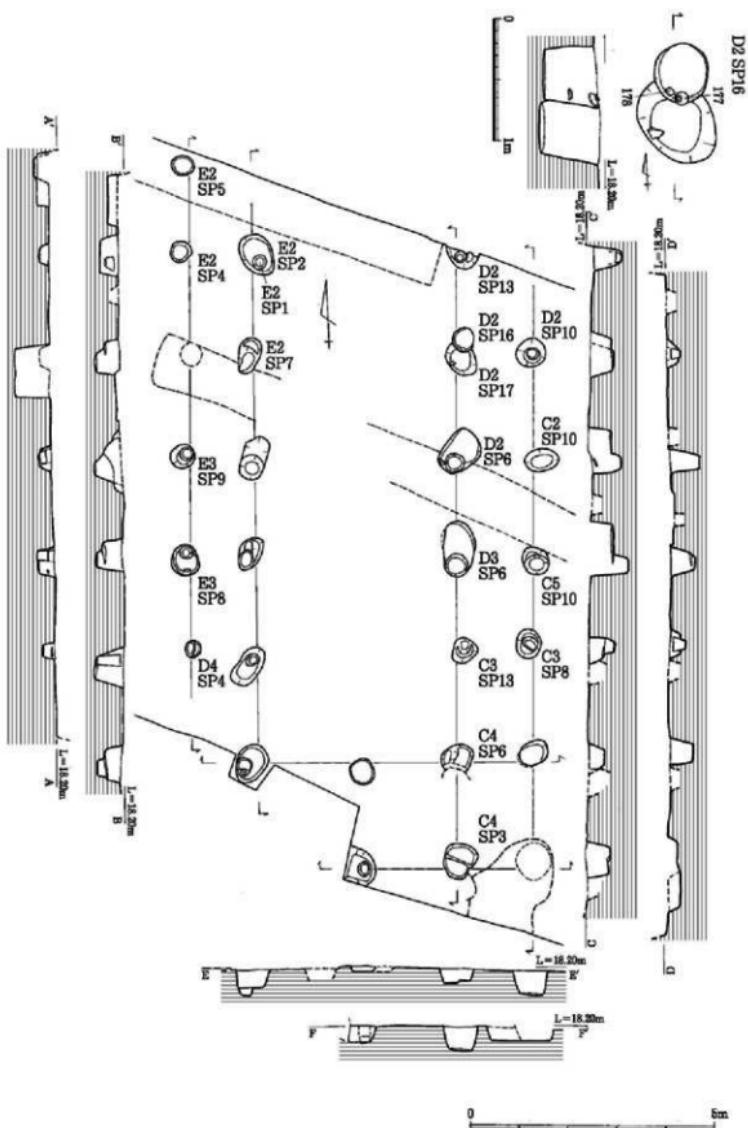
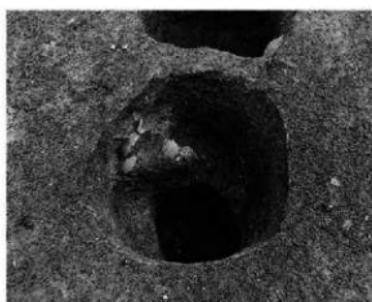


Fig.27 SB01実測図 ( $S=1/100 \cdot 1/40$ )

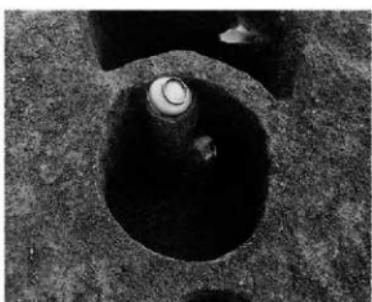


Ph.35 大型建物SB01（北から）

出土遺物 (Fig.32  
Ph.45) 199・200は龍  
泉窯系青磁碗。199は埋  
立時に据えたもので、  
口径13cm器高5.4cm。無  
文で全面に灰オリーブ  
の透明釉を施釉し外底  
を掻き取る。胎土は黄  
味がかった灰色。200  
は口径16.6cm。内面に  
片切彫りの割花文を口  
唇に輪花を施す。全面  
に灰オリーブの透明釉  
を施釉し細かな貫入が  
入る。201は同安窯系青  
磁皿で口径11cm器高1.5  
cm。見込みに櫛描き割  
花文を施し全面に青緑



Ph.36 C3・SP13遺物出土状況（北から）



Ph.37 D2・SP16遺物出土状況（北から）

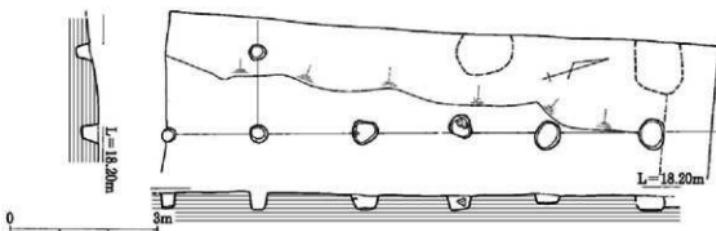


Fig.28 SB02実測図 (S=1/100)

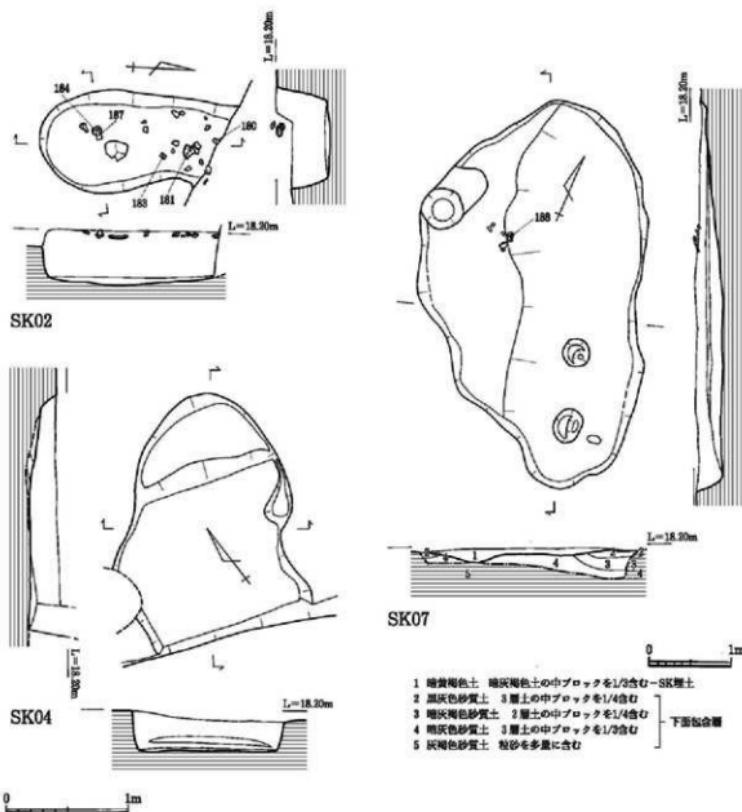


Fig.29 SK02・04・07実測図 ( $S=1/40 \cdot 1/60$ )



Ph.38 SK02 (南から)



Ph.39 SK04 (北から)

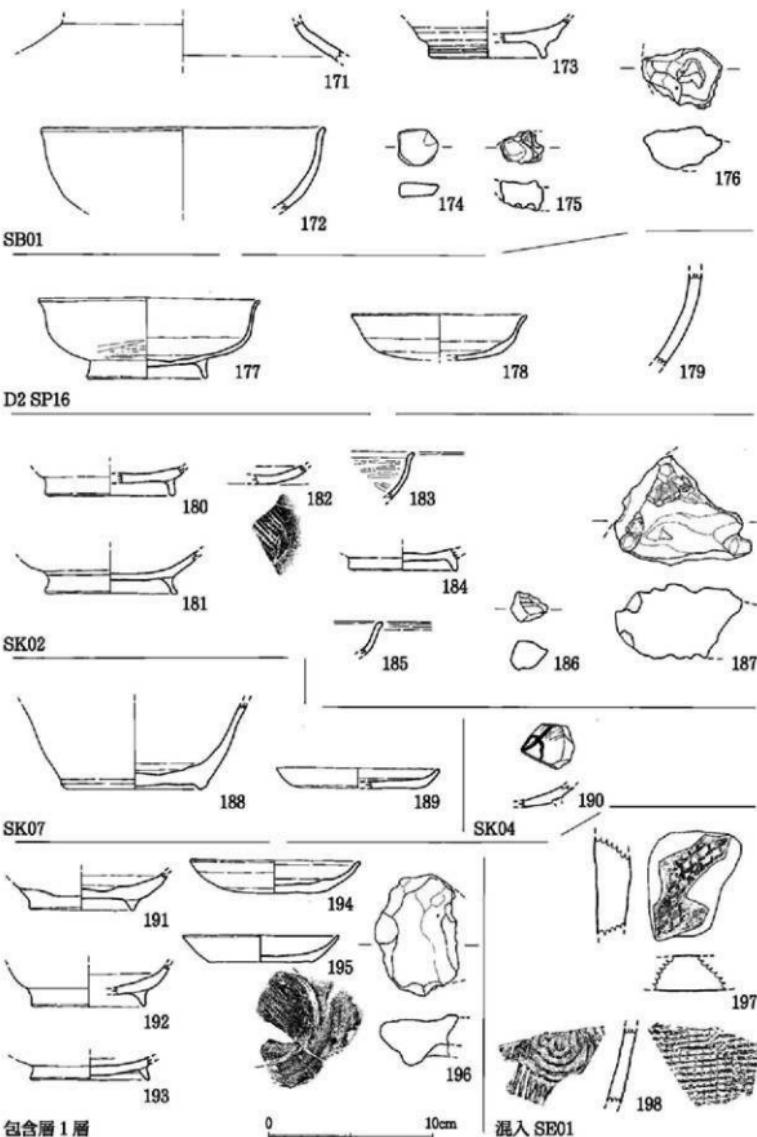
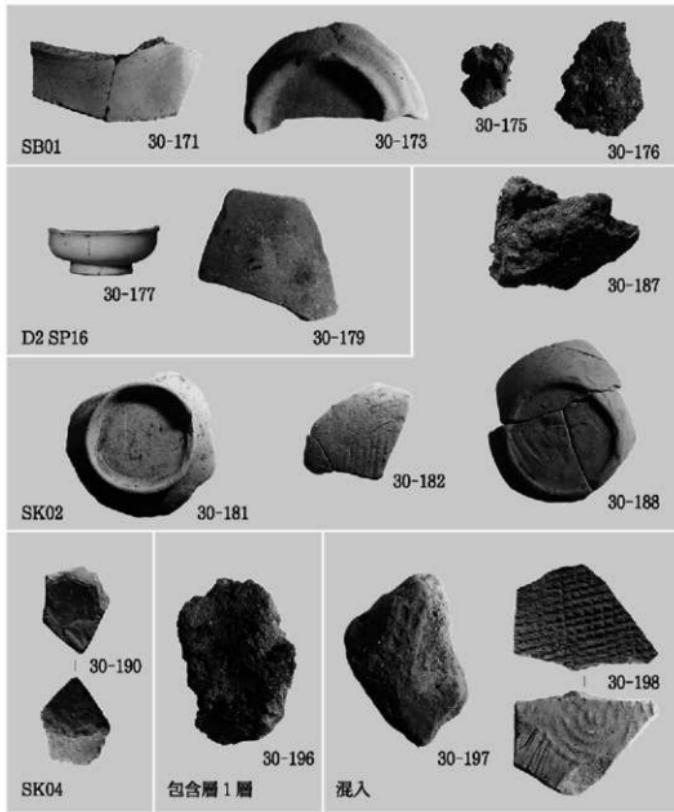


Fig.30 古代の出土遺物実測図 (S=1/3)



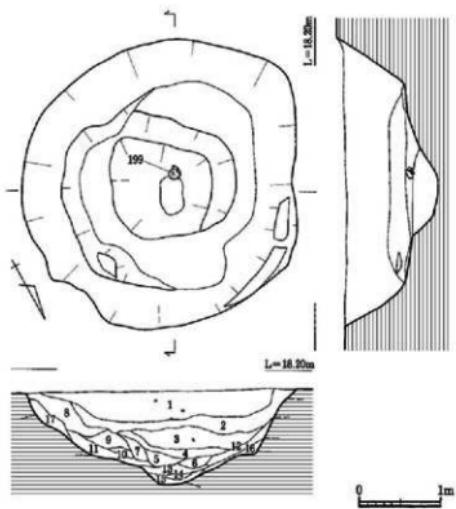
Ph.40 古代の出土遺物



Ph.41 SK07 (南東から)



Ph.42 SK07土器出土状況 (南西から)



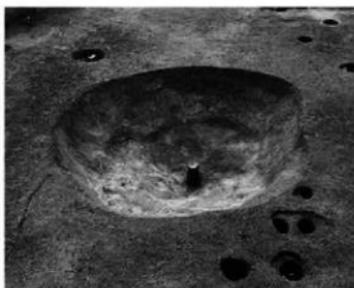
- 1 噴灰褐色土-暗灰褐色土の中ブロックを1/3。土器小片をやや多く含む。粗砂・小礫をやや多く含む
- 2 噴灰褐色土-暗灰褐色土の中ブロックを少量。土器小片をやや多く含む。粗砂・小礫を少量含む
- 3 暗灰褐色土-土器小片を少量。粗砂・小礫を少量含む
- 4 噴灰褐色土-やや乾燥。土器小片を少量。粗砂・小礫を少量含む
- 5 噴灰褐色土
- 6 噴灰褐色土-暗灰褐色土。中ブロックを少量。やや砂質
- 7 噴灰褐色粘質土-土器小片を少量含む
- 8 噴灰褐色粘質土-土器小片を少量含む
- 9 噴灰褐色粘質土-4 磨土。中ブロックを1/3含む
- 10 噴灰褐色粘質土-暗灰褐色土。中ブロックを1/3含む
- 11 噴灰褐色粘質土-4 磨土。中ブロックを1/3含む
- 12 噴灰褐色粘質土-4 磨土を1/3含む
- 13 噴灰褐色粘質土-明黄褐色土。中ブロックを1/3含む
- 14 噴灰褐色粘質土-明黄褐色土。中ブロックを1/2含む
- 15 噴灰褐色粘質土-明黄褐色土。中ブロックを1/2含む
- 16 噬灰色粗砂-明黄褐色土。中ブロックを1/4含む
- 17 噴灰褐色粘質土-8 磨土に黒灰褐色。中ブロックを3/4含む

Fig.31 SE01実測図 (S=1/60)

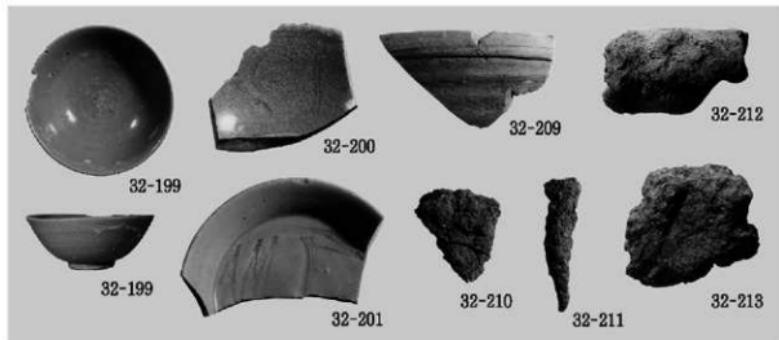
色の透明釉を施釉し外底を搔き取る。胎土は淡灰色。202~205は白磁。202はIV類碗でオリーブがかった透明釉を施釉しピンホールと大きな貫入が入る。胎土淡灰色。203・204はV類碗で203は灰白色透明釉を薄く施釉しピンホールが入る。胎土灰白色。204は底径5.1cm。ややオリーブがかった透明釉を高台脇まで施釉。胎土明灰色。205はVII類高台付皿。やや青みを帯びた透明釉を高台脇まで施釉。胎土灰白色。206は褐釉陶器皿。底径5.6cm。内面に黄褐色不透明釉を施釉。露胎は赤褐色。207は土師器皿。口径7.5cm器高0.8cm。外底を糸切り。内外を回転ナデ。橙色。208は瓦器塊。底径6.4cm。外底回転ナデ。胎土は精良で黒色。209は須恵質鉢で口径24.8cm。外外面に回転ナデ。胎土精良で淡灰色。210は三角の隅角金具で二辺5cm前後厚5mm。211は釘頭部1.6×1.2cm体部8×9mmの角釘。全長8.5cm。212は輪羽口で径6.5cm孔径2.7cmで先端部は灰黒色に熔融し、胎土に砂粒を多量に含み灰黄褐色を呈す。以上12世紀後半を示す。



Ph.43 SE01土層断面 (北から)



Ph.44 SE01 (北から)



Ph.45 SE01出土遺物

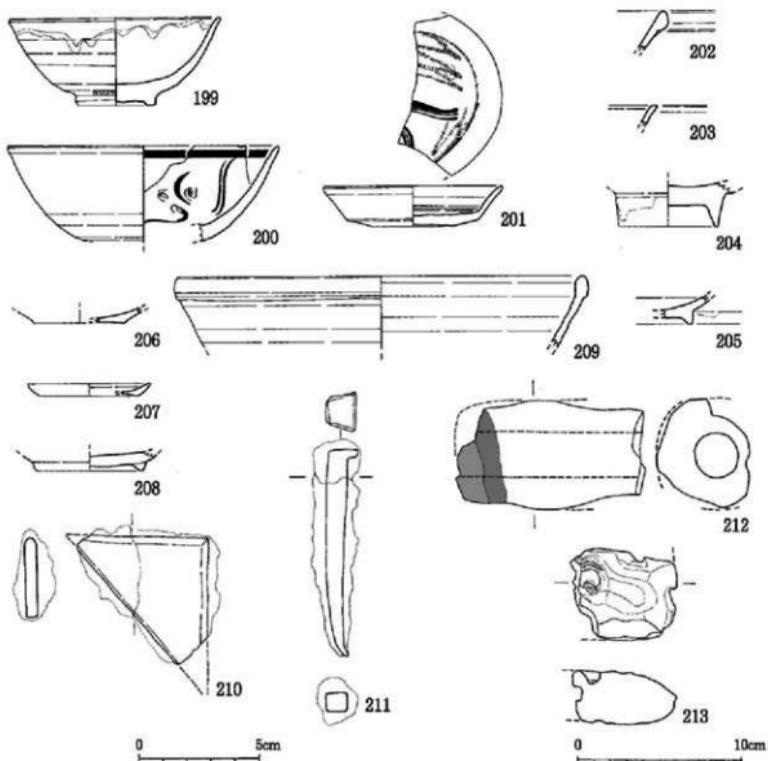


Fig.32 SE01出土遺物実測図 (S=1/3 • 210・211-1/2)

## IV. 小結

調査の結果、本調査区は低位段丘砂礫台地の中央部に位置し、上面で弥生時代中期後半の溝1条、10世紀の大型建物1棟・掘立柱建物1棟・土壙3基、12世紀後半の井戸1基・土壙1基を、下面で弥生時代中期後半の竪穴住居2軒・後期前半の竪穴住居1軒・土壙3基、古墳時代前期中頃～後半の竪穴住居1軒・土壙5基を検出した。

遺物としては弥生時代板付I～IIa式期の遺物を後代の遺構混入資料として採集し、遺跡群内で弥生時代最古期の資料となる。摩滅は殆ど受けおらず、調査区南から東の近接した範囲に遺構が存在すると考えられる。夜臼式期の遺物は遺跡南部台地上の2次調査区・低地部の本調査区北西に位置する5・6次調査区でまとまった資料が検出されており、また、上流部の重留遺跡群2次調査でも同時期の溝が検出され、早い時期に平野上流部まで初期農耕期の遺跡が展開する。遺構は遺跡群内の数カ所で検出される可能性がある。

弥生時代の遺構は南部台地上の3次調査区で袋状竪穴・土壙が、同じく南部4次調査区で中期の竪穴住居・土壙が検出されているが、中・北部の低地部では初めての検出である。後期前半のSC02出土の半島瓦質土器片44は、終末期の混入資料があるものの、原遺跡20次調査で中期後半期からの出土があり、後期前半の出土としても矛盾はない。併せて、中期後半のSD01出土の鋳造鉄斧片64・後期前半の西部瀬戸内系の四線文土器169の出土は、海岸部の西新町遺跡に劣らない先進性を示している。なお、対岸の太田遺跡1次調査区からは弥生後期中頃の溝から東海系の高坏・器台が、四線文土器は最近元岡・桑原遺跡群42次調査で須歎II式に伴って壺の破片が検出されている。

古墳時代前期の遺構は北低地部の5次調査区で本調査区と同時期の竪穴住居・水路が、8・13次調査区では水路が検出され、前期の集落は北の低地部に集中する。本調査区SC01からは陶質土器と多くの山陰系・吉備系等の外来系土器を出土した。5次調査区でも東部瀬戸内系壺、8・13次調査区で山陰系壺を検出しており、海岸部の西新町遺跡・藤崎遺跡同様、広域にわたる交流を示している。

5世紀代の遺構は今回検出されなかったが、引き続き低地部に集落は展開し、5次調査区で竪穴住居・土壙・水路が、8次調査区で水路廐棄時の祭祀跡が検出され陶質土器を出土している。次郎丸遺跡1・3次調査区でも水路廐棄時の祭祀跡が検出され、多量の鉄滓と瓦質・陶質土器を出土している。

古墳時代後期は、集落は南部台地上に移り、1・4・11次調査区で多くの竪穴住居・掘立柱建物が検出され中心を成している。4次調査区では大壁建物が3棟検出されており、吉武遺跡群9次調査・梅林遺跡1次調査例とともに半島色が強い。

古代はほぼ磁北に沿う、10世紀前半～中頃の四面庇を持つと思われる4間×7間以上の大型建物1棟を検出した。関連資料として2点の縁軸陶器179・190がある。当該地は『和名抄』に記載される早良七郷の「能解郷」にあたり、後に「野介莊」が置かれた地域である。南部台地上の2・4・11次調査区で溝・掘立柱建物が、北部低地部の5次調査区で8世紀代の溝が検出され、中心は南部にある。4次調査区では6棟の大型建物が検出され、このうち5棟が磁北方向を採る。報告は古代とするのみで詳細な時期を明示していないが、土壙等の出土遺物から類推すると、8世紀前半を中心に7世紀後半～9世紀初頭と考えられる。円面鏡・「坏」の刻字土器が出土しており、官衙的な建物群とされる。時期的には4次調査区が先行しており、これが数世代間を挟んで、10世紀前半～中頃に本調査区域に移転した可能性が示唆される。

中世は12世紀後半の井戸SE01と土壙SK01があり、掘立柱建物SB02も該期に相当する可能性がある。

南部台地上の1・4・7・11次調査区で15~16世紀代の溝・掘立柱建物・庭園・道路が検出され、16世紀初頭の文書にある、片江神松寺の末寺・承天寺の末末寺とされる「野芥大聖寺」の可能性が考えられている。北部低地部では5次調査区で13世紀代の溝が検出されている。

参照文献：「野芥遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第297集1992

「野芥遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第575集1998

「野芥遺跡3」福岡市埋蔵文化財調査報告書第576集1998

「野芥4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第804集2004

「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書6」福岡市埋蔵文化財調査報告書第609集1999

「福岡市埋蔵文化財年報VOL.20」2007

「原遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第688集2001

「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第467集1996

「次郎丸遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第468集1996

「太田遺跡I」福岡市埋蔵文化財調査報告書第239集1991

「吉武遺跡群XVII」福岡市埋蔵文化財調査報告書第864集2005

「梅林遺跡第1次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第648集2000

「入部II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第268集1999

Tab.1 造構一覧表

住居番号	グリット	時期	規 模		主な出土遺物	備 考	押出番号	写真番号		
			幅(横)×深さ(奥)(m)	平面形						
SC01	D2下面	古墳崩壊中～後半	3.75×3.2×0.14	廣丸方形	土師器(壺・釜・甕・瓦环)・陶質土器(鏡)・弥生土器(壺・釜・高环)・石器(石刀)・石斧(石核)・土製品(土器片円錐)・灰		28	19~25		
SC02	E4下面	舟生崩壊中	5.3×1.87+α×0.25	廣丸方形	弥生土器(壺・釜・高环・灰环・罐)・瓦質土器(壺)・合鉢灰岸	SC03~84を切る	5	5~8~9		
SC03	D3下面	舟生中崩壊中	3.15×3.06×0.24	廣丸方形	弥生土器(壺・釜・灰)	SC04を切る	5	5~6		
SC04	E3下面	舟生中崩壊中	4.67×3.0+α×0.14	廣丸方形	弥生土器(壺・釜・丹塗器・広口壺・瓦器割合)		5	4~5		
建 物			規 模		種 別 方 位		主な出土 遺 物			
番号			幅(横)×幅(縦)・縦(奥)(m)		種 別	方 位	主な出土 遺 物	備 考		
SB01	10C前半～中	4×7+α+(7.1×12.5+α)			側性	N=3°~E	須恵器(壺)・土師器(壺・高台壺・环・罐)・弥生土器(丹・灰・灰环・灰)・土製品(土器片円錐)	SK04~97を切る	27	35
SB02	11C?	2+α×5+α+(2.3+α×9.6+α)			側向	N=18°~E	土師器(环)		28	
土 壤			規 模		主な出土 遺 物		備 考			
番号			幅(横)×深さ(奥)(m)		主な出土 遺 物		押出番号	写真番号		
SK01	C1上面	中世	1.6×1.73+α×0.15	廣丸方形	土師器(环・甕)					
SK02	C1上面	10C前半～中	0.83×3.45+α×0.24	溝状	土師器(壺・环・高台壺・罐)・黑色A(环・高台壺・罐)・黑色B(环)・灰	SB01の雨落ち壺?	29	38		
SK03	C3上面	古墳?	1.66×0.63×0.18	不整形	土師器(壺)					
SK04	C4上面	10C前～後半	1.3×1.96+α×0.29	不整形	綠釉(壺)・灰質土器(器台)・土師器(壺・瓶)・弥生土器(甕)・砂岩(0)・灰		29	39		
SK05	D3上面	古墳崩壊中～後半	1.1×0.65+α×0.59	橢円形	土師器(甕・高环)・弥生土器(甕)					
SK07	D8上面	10C前～後半	4.7×2.75×0.35	不整形	土師器(高台壺・环・罐)・古墳土器(甕)・弥生土器(甕)・ob(石核)		29	41~42		
SK09	D8下面	舟生中崩壊中	1.15×0.8+α×0.16	円形	弥生土器(甕)・土製品(土器片円錐)		11	11		
SK10	E2下面	古墳崩壊中～後半	1.05×0.92+α×0.21	廣丸方形	土師器(甕)・弥生土器(甕)		24	30		
SK11	E3下面	古墳崩壊中	2.16×1.13×0.13	橢円形	土師器(甕)・弥生土器(甕)・石器(石臼)		24	28~29		
SK12	E3下面	古墳崩壊中～後半	1.92×1.65×0.21	不整形	土師器(甕・罐)・弥生土器(大底罐・罐・丹塗土器)・土製品(土器片円錐)・砂岩(0)・灰		24	31~32		
SK13	E4下面	舟生崩壊中	1.08×0.94×0.06	方円形	弥生土器(甕)		11	12		
井戸番号			規 模		主な出土 遺 物		備 考			
番号			幅(横)×深さ(奥)(m)		主な出土 遺 物		押出番号	写真番号		
SD01	B2上面	12C後半	3.65×3.45×1.23	円形	青磁(粗足1脚・底)・白磁(N・V・W・底)・高輪盤輪脚器(甕)・瓦器(黑色A(环)・灰)・須恵器(壺・甕)・土師器(H・底・瓦台杯)・古墳土器(壺・罐)・弥生土器(灰环)・砂岩(0)・灰・石製品(石臼)・土製品(土器片)		31	43~44		
溝番号			規 模		主な出土 遺 物		備 考			
番号			幅(横)×深さ(奥)(m)		主な出土 遺 物		押出番号	写真番号		
SD01	E4上面	舟生中崩壊中	1.35×0.81		弥生土器(壺・甕・鉢・丹塗高环・甕)・铁器(鍛造物)		11			

## 報告書抄録

ふりがな	のけ							
書名	野芥遺跡5							
副書名	野芥遺跡群第12次調査報告							
卷次	5							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	987							
編著者名	加藤良彦							
発行機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	20080317							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野芥遺跡群 第12次	ふくおかし さわらくるの 福岡市早良区野 芥853-1,3外	40135	0319	33° 32' 35"	130° 20' 00"	20040105 20040218	291	自宅兼用共同 住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
野芥遺跡群	集落	弥生 古墳 古代 中世	堅穴住居 大型建物 土壙 井戸	弥生土器・嘴状 縫器・古式土師 器・陶質土器・ 錐形陶器・貿易 陶磁	古墳時代前期中～後半の堅穴住居より半 島陶質土器片と近畿・山陰・吉備など多 くの外来系土器が出土			

## 野芥遺跡5

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第987集

2008年（平成20年）3月17日

発行 福岡市教育委員会  
〒810-0001 福岡市中央区天神1丁目8の1

印刷 有限会社 潤川印刷所  
〒812-0051 福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6の46